杏林社会科学研究
第 39 巻 2 号
2024 年 3 月

アメリカのリアリズム
――古典的リアリズムからネオクラシカル・リアリズムまで

島 村 直 幸

はじめに―アメリカ独自の「リアリズム」？

第三イメージは、世界政治の枠組みを説明するが、第一イメージと第二イメージなしには、政策を決定する諸力についての知識を獲得することはできない。第一イメージと第二イメージは、世界政治の諸力を説明するが、第三イメージなしには、それらの重要性を評価したり、それらの結果を予測したりすることは不可能である[1)]。

ケネス・ウォルツ『人間、国家、戦争』(1959年)

国家は、より正確に言えば、それを代表して行動する政策決定者たちと制度は、いかにして国際的な脅威と機会を評価するのか？　対外的な脅威の性質について意見の不一致がある時に、何が起こるのか？　誰が、対外政策の代替案が受諾できるか、それとも受諾できないかの範囲を最終的に決定するのか？　どの程度まで、またいかなる条件の下で、国内の行為主体（アクター）は国家の指導者たちと取り引きし、対外政策や安全保障政策に影響を及ぼすのか？　いかにして、またいかなる環境の下で、国内の行為主体は、国家が勢力均衡の理論や脅威の均衡の理論が予測する戦略の類型を追求することを妨げるのか？　最後に、いかにして国家は、対外政策や安全保障政策を履行するために必要な資源を抽出し動員しうるのか？

これらは、国際政治の支配的なネオリアリストやリベラリストの理論では答えの出ない重要な問いである[2)]。

ロベル、リップスマン、タリアフェッロ編『ネオクラシカル・リアリズムと国家、対外政策』(2009年)

リアリズムは、歴史とともに“変化しない”持続的な側面を捉え、特に国際秩序の安定・不安定を分析する。そのため、リアリズムは、変化を説明するのが苦手である。これに対して、リベラリズムは、“変化する”側面を捉え、説明しようとする[3)]。国際関係論は、主にリアリズムとリベラリズムの論争を軸に展開・発展してきた。

モーゲンソーはリアリズムの「普遍性」を説いたが[4)]、リアリズムは各国で多種多様で、独自性がある。地政学上の位置や国際秩序での地位、歴史、政治経済社会、戦略的文化などの相違から、独自性が生まれると考えられる。また第二次世界大戦後の冷戦期、アメリカでリアリズムが誕生・発展し、それが世界に広がった。特にモーゲンソーの政治的リアリズムであったが、それは各国で反発も生んだ。そのことが各国のリアリズムの独自性へつながったという側面もある。

アメリカでのリアリズムの始動を見ると、モーゲンソーやハーツ、キッシンジャー、ホフマン、ウォルファーズなどユダヤ系亡命知識人がヨーロッパ的な知的関心をアメリカにもたらしたことがわかる。ホロコーストから逃れてきた経験から、国際秩序の“安定への渇望”が彼らには見られる[5)]。また、ケナンやニーバーなど、同じくアメリカの古典的リアリズムの形成に貢献した人物たちは、近代のヨーロッパ、特に17世紀以降の啓蒙主義の政治思想や18-19世紀の「古典外交」への造詣が深かった。こうして、アメリカでの古典的リアリズムの体系化は、きわめてヨーロッパ的なものであった。

モーゲンソーは、まず『科学的人間と権力政治』(1946年)で17世紀以降のリベラリズムと合理主義(特に1930年代の衰退リベラリズム)を批判して、政治的リアリズムの必要性を説いた。すでに見た通り、モーゲンソーはユダ

ヤ系亡命知識人のため、ヨーロッパ的リアリズムをアメリカに持ち込んだのである。また彼は、国内問題を国際問題に適応する国内類推に批判的であった。そして、社会科学と自然科学の原理的な相違を強調した。彼は、因果関係を単一要因に求める説明も批判した（主要原因と副次的原因の区別）[6)]。

モーゲンソーはその2年後、『国際政治』（1948年）をまとめ（改訂第5版は1978年）、「国際政治は、国内政治と同様、権力闘争である」として、人間の本性としての権力欲にまで議論を深めた。またモーゲンソーは、「力として定義される利益」ないし「国益」に注目することで、合理的な視角が得られると考えた。「力として定義される利益の概念は、観察者に知的準則を与える。そしてこの概念は、政治の題材に合理的秩序を導入し、こうして政治の理論的な理解を可能にするのである」と指摘された[7)]。

モーゲンソーは、「調停者となるものが誰もいない状況で稀少資源をめぐる競争が起きるとパワーへの闘争が競争者の間で続いて起こる」とも指摘し、無政府状態（アナーキー）の秩序原理を強調した。そのため、相対的利得の重要性を説き、国際協力はほぼ不可能である、と結論づけた。彼は、「世界政府は現在不可能なので、勢力均衡（BOP）政治が不可避的に必然となる」とも指摘し、政治家・外交官の“慎慮さ（prudence）”の重要性を力説した。また彼は、多極安定論の立場をとった[8)]。こうして、モーゲンソーは、国際政治学をアメリカではじめて体系化した。議題設定したとも言えよう。その後、「モーゲンソーとの対話」と呼ばれたリアリズムとリベラリズムの大論争が争われていく。

特にモーゲンソーには、社会学者のウェーバーと政治学者のシュミット、歴史家のランケやマイネッケ、社会学者のハーバーマスの影響があったと考えられる[9)]。リアリズムの思想的ルーツとしては、ツキディディスとヘロドトス、アウグスティヌス、マキャベリ、ホッブス、モンテスキュー、ルソー、ハミルトン、アダムズ、クラウゼヴィッツ、シュミット、マイネッケなどが指摘される[10)]。たとえば、歴史家のツキディディスは、「アテネの国力の増大と、これがラケダイモンの心中に引き起こした恐怖とが、戦争を不可避に

した」と指摘した[11)]。ウォルツによれば、分析レベル上、国際システム・レベルの「第三イメージ」に基づく発想であるという[12)]。これに対して、リベラリズムの思想的ルーツは、カントやロック、ウィルソンである[13)]。

本稿では、アメリカのリアリズムを古典的リアリズムの誕生からネオリアリズムへ、さらに攻撃的リアリズムと防御的リアリズムからネオクラシカル・リアリズム（新古典的リアリズム）までその変遷を俯瞰する。それぞれのリアリズムを詳細に分析する先行研究はあったが、古典的リアリズムからネオクラシカル・リアリズムまでの流れを大きく捉えた分析は、まったくないというわけではないが、数少ない。これまで意外と論じられてこなかったアメリカのリアリズムの鳥観図を描くのが本稿の目的である。

また、学説史としての意義も持たせるため、教科書的に感じるかもしれないが、主要な文献の紹介にも努める。

以下、導入部分となる第1章では、理論をめぐる諸問題、すなわち、理論と理論の間、理論と政策の間、理論と歴史の間をまず取り上げる。第2章で、古典的リアリズムからネオリアリズムへの変化を考察した上で、第3章で、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムからネオクラシカル・リアリズムへの変化を分析する。終章では、本稿の分析から導き出される結論をまとめ、いくつかの問題提起を行う。

第1節　理論をめぐる諸問題

(1) 理論と理論との間

国際関係論では、モーゲンソーによってリアリズムが体系化されて以降、4つの論争が特にリアリズムとリベラリズムの論争を軸に展開されてきた。

第一に、リアリズム対リベラリズムの大論争で、実体論をめぐる第一の論争である。1940年代後半以降、「モーゲンソーとの対話」の時期に入っていく。冷戦という国際環境もあり、リアリズムが勝利した形で終わった。

第二に、科学的・合理的なアプローチ対伝統的なアプローチの大論争で、

方法論をめぐる第二の論争である。1950-60年代に、「行動科学革命」が起こり、科学的・合理的なアプローチが勝利した形で論争は終わったが、モーゲンソーなど古典的なリアリズムは反発した。たとえば、ファレル・スミス編『国際関係の理論と現実』（1967年）には、アロンやモーゲンソー、ウォルツ、ドイッチェなどが寄稿し、行動科学のアプローチを批判した[14)]。1970年代以降、リアリズムは（リベラリズムも）より科学的・合理的アプローチへと傾斜していく。

第三に、リアリズムとリベラリズム、グローバリズムの理論の三者鼎立状況が1970年代以降、見られた[15)]。リベラリズムは、リアリズムに対して、「単純で時代遅れ」との批判を展開する[16)]。ネオリアリズム誕生の揺籃期と一般的に見られており、リベラリズムはコヘインとナイが「複合的相互依存」論を提示した[17)]。リアリズムとリベラリズムの論争から距離を置いたグローバリズムは、従属論から世界システム論へと発展を遂げた[18)]。グローバリズムの思想的なルーツは、マルクスである[19)]。

第四に、ネオリアリズム対ネオリベラリズムの「ネオ・ネオ論争」である。国際協力の可否をめぐる1980年代以降の第四の論争であった。ネオリベラリズムは、システムの秩序原理がアナーキーで国家が合理的・統一的なアクターであるというリアリズムの前提を受け入れた上で、国際協力の可能性を論じた。相対的利得か絶対的利得かをめぐる論争であったが、問題領域によって相対的利益と絶対的利得のいずれかが重要になるという形で、「ネオ・ネオ統合」へと至った。ネオリアリズムもネオリベラリズムも、方法論はお互いに科学的・合理的なアプローチであった[20)]。

第四の大論争は、もう一つの論争がほぼ同時進行で進んだ。冷戦の終結後の1990年代、「ネオ・ネオ」の科学的・合理的なアプローチ対コンストラクティヴィズム（構成主義）の大論争、哲学をめぐる論争である。冷戦の終結を予測できなかったことで、ネオリアリズム（とネオリベラリズム）の科学的・合理的アプローチの説明能力に疑問符がつき、コンストラクティヴィズムからの批判が起きたのである[21)]。これに刺激を受けて、ネオクラシカル・

リアリズムが台頭する[22)]。ネオクラシカル・リアリズムについては、第3章で詳述する。

コンストラクティヴィズムは、アイディアや規範、アイデンティティーなど“目に見えない”側面を重視し、構造とユニット、“全体”と“個”との間のリフレクティブな相互作用による国際システムの再構築のプロセスを説明しようとした。このパラダイムは、間主観性（inter-subjectivity）を重視する。また、科学的・合理的アプローチを批判したが、事例研究は不得手であった[23)]。

これらの四つの大論争以降、21世紀にかけて、「パラダイム間論争の欠如」ないし「論争なき棲み分け」の理論動向が続いた。合理的選択論や実証主義のアプローチが主流となる一方で、ネオリアリズムの分化へとつながっていくのである。

合理的選択論や実証主義のアプローチについては、たとえば、ブラウン・コテ・リンジョーンズ・ミラー『合理的選択と安全保障研究』（2000年）やヴァン・エヴェラ『政治科学の学生のための研究手法の手引き』（1997年）、パウエル『パワーの影のなかで』（1999年）、フェアロン「バーゲニング、強制、国際協力」（1998年）や「戦争のためのラショナリストの説明」（1995年）、「シグナリング対勢力均衡と利益」（1994年）、鈴木基史『国際関係』（2000年）、中村長史「ラショナリズム」（2023年）などがある[24)]。

(2) 理論と政策との間

特に冷戦前期、体系化も間もないリアリズムは、アメリカの対外政策にダイレクトな影響を及ぼした。特にシェリングの『紛争の戦略』（1960年）が核抑止の政策に大きな影響力を及ぼしたと言ってよい[25)]。また注目すべきことに、冷戦期の「封じ込め（containment）」のようにリアリズムの対外政策に見えるものにもリベラリズムの要素が入り込んでいたり、冷戦後の「関与（engagement）」のようにリベラリズムの対外政策に見えるものにもリアリズムの要素が入り込んでいたりいた。

冷戦期には、たとえば、「封じ込め」をはじめ、アイゼンハワー政権の

「ニュールック」と大量報復理論（massive distraction）と瀬戸際政策、核抑止論、ケネディ政権の柔軟反応（flexible response）戦略・多角的オプション戦略、ジョンソン政権の相互確証破壊（MAD）、ニクソン政権の「デタント（détente）」政策、レーガン政権の「力による平和（peace through strength）」のアプローチ、ブッシュ・シニア政権の実務外交などの対外政策が展開された。

理論と政策の関係については、シェリング『紛争の戦略』（1960年）やスミス『現実主義の国際政治思想』（1996年）、バックリン『リアリズムとアメリカの対外政策』（2001年）、カクリック『盲目の信託』（2006年）、青野・倉科・宮田編著『現代アメリカ政治外交史』（2020年）などが参考になる[26)]。

冷戦後から21世紀にかけては、たとえば、冷戦後のクリントン政権の「関与と拡大（engagement and enlargement」（「牽制と抱擁（hedge and embrace）」ないし「統合と牽制（integrate, but hedge）」の両面政策へ）、W・ブッシュ政権の「先制（pre-emption）」、オバマ政権の「アジア旋回（pivot to Asia）」ないし「再均衡（rebalancing）」、「エア・シー・バトル」構想と「オフッショア・バランシング」戦略、「関与」政策への幻滅、トランプ政権の「アメリカ第一主義（America First）」で「アメリカを再び偉大にする（MAGA）」、バイデン政権の「インド太平洋（Indo-Pacific）」戦略と「中間層のための外交」などの政策が展開されてきた。また、オバマ政権期以降、特にトランプ政権期だが、アメリカのパワーの相対的な低下にともない、「抑制（restraint）」や「縮小（retrenchment）」も議論されてきた[27)]。

(3) 理論と歴史との間

理論と歴史の関係は、特にアメリカの理論が科学的・合理的なアプローチに傾斜してきたため、「対話なき棲み分け」で、理論の没歴史性、理論の歴史の軽視へとつながってきた。

理論と歴史の間の境界線をまず指摘できる。両者の研究アプローチは、以下の点をめぐって対照的ですらある。たとえば、普遍性（nomothetic）と特殊性（idiographic）、一般化と具体化（目的に関する考え方）、理論に基づい

た説明・分析（analysis）と叙述（narrative）・通観（synoptic judgement）・戯曲化、異なる認識論と方法論、外的有効性と内的有効性、共約可能性の是非、事例の位置づけ、逸脱事例への対応の相違、分析上の前提と因果関係の命題をどの程度明らかにするか（無条件の因果関係と状況依存的因果関係）、簡潔性（parsimony）へのこだわりと総体的・全体論的（holistic）説明、過剰要因説明（overdetermined explanation）や同一結果（equifinality）への寛容さ、理論的一般化を制限する範囲条件（scope conditions）の違い、目的的・意図的行動と意図せざる結果に対する力点の置き方、行動（behavior）と作為（human conduct）、道義の問題、予測（forecasting）や政策提言に関する考え方の相違、不確実性と非線形の複雑性をめぐる見解、過去の推測（retrodiction）、美意識（どこまで見せるか）などである。

理論と歴史の間には架け橋もある。たとえば、反実仮想（counterfactual）〔歴史のif〕の手法、過程追跡（process tracing）・総括（colligation）・連鎖的・発生論的説明、一致の方法（congruence method）、系統的・重点的比較（structured focused comparison）の方法論、類型理論（typological theory）〔一般法則<covering laws >という概念と異なり、条件付き一般化を行う〕、経路依存（path dependency）、因果メカニズムの解明、中範囲の理論（時間と空間を限定する）、分析的叙述、内生性（endogeneity）、過程構築（process construction）、理論家による一次資料調査、コンストラクティヴィズムやネオクラシカル・リアリズムによる国際政治の変化の説明などである。

歴史家が理論を使う事例もある。たとえば、ギャディスは、歴史家ながら、『長い平和』（1987年）で、ウォルツの双極安定論を歴史研究に適応し、核兵器による抑止効果やゲームのルール（たとえば、米ソ2つの超大国がお互いに戦わないとか、お互いの勢力圏に口出ししないなど）、米ソ間での相互依存の欠如などが国際秩序の安定要因となっていることなどを論じた[28)]。

理論と歴史の間については、たとえば、エルマン・エルマン『歴史家、社会科学者、国際関係の研究』（2002年）、ギャディス『歴史の風景』（2002年）、ニュースタッド・メイ『ハーバード流歴史活用法』（1986年）、トラクテン

バーグ『国際関係史の技法』(2006年)、メイ・ローゼンクランス・ステイナー『歴史とネオリアリズム』(2010年)、ローレン・クレイグ・ジョージ『軍事力と現代外交［第5版］』(2014年) などが参考になる[29)]。

第2節　アメリカのリアリズムの展開―古典的リアリズムからネオリアリズムへ

(1) 古典的リアリズムの誕生と発展

繰り返しになるが、アメリカで古典的リアリズムをはじめて体系化したのは、ユダヤ系亡命知識人のモーゲンソーである。「はじめに」で分析した『科学的人間と権力政治』(1946年) と『国際政治』(1948年) の他にも、『国益を擁護する』(1951年) や『アメリカ対外政策』(1952年)、『アメリカ政治の目的』(1960年)、『アメリカ対外政策の袋小路』(1962年)、『合衆国のための新しい対外政策』(1969年)、『20世紀の政治』(1971年) などを書き残している[30)]。

モーゲンソーは、ジョンソン政権によるヴェトナム戦争に批判的であった。ヴェトナムがアメリカの死活的な国益に関わらないためである。そのため、彼は、国務省と国防総省の助言者の職を解かれている。また彼は、『国際政治』を改訂第5版 (1978年) まで改訂している[31)]。

ケナンは、「封じ込め」政策の立案者であり、『アメリカ外交50年』(1951年) で、アメリカ外交の「法律家的・道徳家的アプローチ」を厳しく批判した。国内問題を国際問題に適応する国内類推にも批判的であった[32)]。また彼は、モーゲンソーと同じく、ジョンソン政権によるヴェトナム戦争を批判した。やはり、アメリカにとって死活的な国益に関わらないためである。

ニーバーは、『悲劇を超えて』(1937年) や『アメリカ史のアイロニー』(1952年)、『クリスチャン・リアリズムと政治的問題』(1953年)、『道徳的人間と非道徳的社会』(1960年) を書き残している。政治的リアリストであり、特に「クリスチャン・リアリスト」と呼ばれる[33)]。彼は、理想主義者とリベラリスト、マルクス主義者を批判した。また彼は、「政治的現実主義は人間

の本性への真の洞察なしには不可能である」[34]、例外なく「パワーをパワーでもって均衡させることになる政治戦略は、罪深い人間の性格」のため必然である、と指摘する[35]。ニーバーのリアリズムについては、ペドロの『ラインホルト・ニーバーと国際関係理論』(2021年) が参考になる[36]。

ユダヤ系亡命知識人のハーツは、国家は無政府状態（アナーキー）から生まれる「安全保障のディレンマ」に直面するために相対的なパワーの優位を目指す、といみじくも指摘した。彼は、「理想主義者の国際主義と安全保障のディレンマ」(1950年) や『政治的リアリズムと政治的理想主義』(1951年)、『原子力時代の国際政治』(1959年) を残している[37]。

キッシンジャーは、20世紀後半から21世紀はじめにかけて数多くの著作を書き残している。たとえば、2冊の重厚な回顧録[38] の他にも、『回復された世界平和』(1957年) や『核兵器と対外政策』(1957年)、『アメリカの対外政策』（1969年)、『外交』（1994年)、『アメリカは対外政策が必要か？』(2001年)、『中国』(2012年)、『世界秩序』(2014年) などである[39]。

ユダヤ系亡命知識人のキッシンジャーは、ヨーロッパ的リアリズムであり、特に『回復された世界平和』で、正統体系と革命体系の類型を提示し、「現状変革国家（revisionist power）が国際秩序を揺るがす」と想定した。彼にとっては、国際秩序の正統性と安定・不安定が重要なのである[40]。彼は、ビスマルク外交について博士論文の導入を書いていて、メッテルニヒ＝カースルリー外交が博士論文になってしまったという天才である。大国間の勢力均衡（BOP）を重視し、モーゲンソーと同じく、政治家・外交官の“慎慮さ”の必要性を説く[41]。また彼は、『外交』で、20世紀のアメリカで理念外交ではなく権力外交を主として展開したのは、セオドア・ローズヴェルト大統領とニクソン大統領のみである、と指摘した点も注目される[42]。

同じくユダヤ系亡命知識人のホフマンは、『現代理論』（1960）や『ガリバーの苦難か、アメリカの対外政策の設定か』(1968年)、『優位か世界秩序か』（1978年)、『国境を越える義務』（1981年)、『ヤヌスとミネルヴァ』(1987年) などを残している[43]。彼も、ヨーロッパ的リアリズトだが、ニク

ソン大統領とキッシンジャー国家安全保障問題担当大統領補佐官のヨーロッパ流の「デタント」政策を批判した。彼は、フランス学派のアロンや英国学派のブルを高く評価する。「モンテスキューとトクヴィル、アロンの弟子である」と自認していた[44)]。ホフマンは、あるところでは構造を部分の配列（パワーのパターン）によって定義し、またあるところではこれらの部分の特性（国家の同質性もしくは異質性）によって定義する。国家の具体的な特性、すなわち支配者たちの野望、彼らの用いる手段、国家の統一度、政治制度の特質などすべてが構造の定義の一部となっているのである（ネオリアリズムのウォルツによれば、インサイド・アウトの説明）。こうして、彼は、外交政策や国家の相互作用がもたらす結果に重要な影響を持つと考えられるものの総体を「構造」と定義した[45)]。

またホフマンは、1970年代の国際政治は5つの大国が台頭しつつあるとして、フランス革命前後のように穏健で安定している、と指摘したが、彼は以前には、双極の世界も「比較的に穏健である」と見ていた。そのため、読者は、混乱せざるをえない[46)]。

次に見るウォルツによれば、ホフマンは、ルソーの議論を大きく読み違えている。ホフマンは、ルソーの「戦争と平和の問題の解決」は「世界中に理想的な国家をつくること、そうすればカントが述べたような世界連盟の必要もなく、平和が訪れる」という内容であると論じている[47)]。しかし、ルソーのしばしば引用される言明は、以下の通りである。「したがって、共和国はそれ自体がうまく統治されていたとしても、不正な戦争をすることもある」[48)]。

ウォルツの理解では、「ルソーが他の政治思想家たちのなかでも際立っているのは、参加者の属性や行動の観察だけから結果を推論するのが不可能であると強調した点にある。人の場合でも国家の場合でも、行動の文脈が考慮されねればならない。文脈そのものが結果を変えると同時に、主体の属性や目的や行動に影響を与えるからである」[49)]。

(2) ネオリアリズムへの展開

ウォルツは、『人間、国家、戦争』(1954年)で、三つのイメージ(分析レベル)を提示した。ひらめきによる発想であった。かつ妻の助言で「イメージ」という概念を使用した。3週間で博士論文のアウトラインを修正したという。人間・国家・システムの3つのイメージに基づいて、近代ヨーロッパの政治思想と既存の理論を整理整頓したのである[50)]。特にルソーの『ヨーロッパ連邦による永久平和と戦争状態』(1917[1756]年)と『社会契約論』(1950[1762]年)や社会学者のデュルケム『社会学的手法の法則』(1938[1895]年)からの示唆が大きい[51)]。

たとえば、ウォルツは、ルソーの「鹿狩りのディレンマ」の示唆するところを高く評価し、以下の通り、指摘する。無政府状態(アナーキー)の下に存在する「国家は、平和のままでいることを望んでいても、予防戦争を起こすことも考えなければならないかもしれない。良いタイミングで攻撃しなければ、後に敵の側が有利になった時に攻撃されるかもしれないからである」[52)]。また、「国家間の戦争は何によって説明できるのか。ルソーの答えは、実は、戦争は防止するものが何もないから起こるというものである。人間同士と同様、国家間でも利害関係が自動的に調整されることはない。最上位の権威が欠如しているなかでは、紛争が武力によって解決される可能性は常にあるのである」[53)]。さらに、「ルソーは、問題がアクターのみにあるのではなく、彼らが直面している状況にもあることに気づいたのである。 …ルソーの分析は、紛争が人間の社会問題においてどの程度まで必然的に起こるのかということを明らかにしている」[54)]。

また以下の通り、指摘される。「ルソーの著作に反映されている第三イメージは、国家行動の枠組みから生じる結果の分析に基づいている。国家間の戦争の起源についてのルソーの説明は、大きく見れば、われわれが国民国家システムのなかにいる限りにおいて最終的なものである。それが最終的な説明なのは、人間の非合理性とか国家の欠陥といった偶然の原因に頼らず、

いかなる偶然の要因でも戦争をもたらすような枠組みについての理論に基づいているからである。　…そのような枠組みを原因と呼ぶならば、それは戦争の間接原因、もしくは表面下の原因であるとはっきり言った方がいいであろう。これが国際政治に応用されると、ルソーを要約するために先に使った言葉で言えば、戦争は、それを止めるものがないために起こるという命題になる。ルソーの分析は、どれか特定の戦争を説明するのではなく、戦争の繰り返しを説明する。彼は、戦争がいつでも起こりうること、そしてなぜなのかを教えるのである」[55)]。

ウォルツは、「外交政策の理論」ではなく「国際政治の理論」を構築する上で、分析レベルを特にシステム・レベルに定めること説き、還元主義を批判した[56)]。たとえば、カント流の「民主主義による平和（democratic peace）」論に批判的であった[57)]。ウォルツは、国際政治の構造に組み込まれた持続的パターンについて論じたのである[58)]。社会科学の限界を認識し、行動科学革命に批判的であった[59)]。また彼は、因果関係を単一要因に求める説明を批判する（主要原因と副次的原因の区別）[60)]。

また、ウォルツは、特に第三イメージに注目しつつ、国家行動の枠組みを論じた。「おのおのの国家の見地から合理的になされた個々の計算は、アナーキーの状況においては社会的調和を自動的にはもたらさないのである。調和らしき状況が生まれるかどうかは、行動そのものによると同時に、行動の枠組み次第である。　…アナーキーの状況では、相対的利得の方が絶対的利得よりも重要なのである！」[61)]。

こうして、ウォルツは、モーゲンソーと同じく、相対的利得の重要性を説くのである。「古代ギリシャや中世イタリアの都市国家やヨーロッパの国民国家の間では、パワーにおいて他国を出し抜こうと脅かす国家があれば、それを抑制する試みが予期できたのである。そしてこれは、互いを抑制するプロセスを楽しむからではなく、おのおのの国家によって、他国との比較における自国のパワーが、究極的には自国の存続の鍵であるからである」[62)]。

注目すべきことに、1959年の『人間、国家、戦争』でも、勢力均衡（BOP）

を擁護するためにゲーム理論がすでに適応されていた[63]。

ウォルツは、第三イメージに注目しつつも、「対外政策の理論」には第一イメージと第二イメージが必要になることも認識していた。「おのおのの国家は、いかに定義されようと、自らが最善と判断する方法で自己利益を追求する。アナーキーな状態の下では、似通った単位の間で不可避的に生じる利害対立を和解させるような一貫性のある方法、頼りにできるプロセスが存在しないため、軍事力が国家の対外目標を達成する手段となる。国際関係のこのイメージに基づく外交政策は、道徳的でも非道徳的でもなく、単にわれわれを囲む世界に対する理にかなった反応の具体的表現なのである。第三イメージは、国際政治の枠組みを説明するが、第一イメージおよび第二イメージなしには、政策を決定する影響力についての知識はありえない。また、第一イメージおよび第二イメージは国際政治における影響力を説明するが、第三イメージなしには、その結果の重要性を図ったり予測することはできない」と結論づけている[64]。

こうして、ウォルツは、まず第三イメージに注目する点で、1959年の『人間、国家、戦争』の時点ですでに「ネオリアリズム」の立場に立っていたのである。初期ウォルツは、行動科学革命に批判的であったことから、古典的リアリズムの人物として理解されることが多いが、すでにネオリアリストであったと言ってよい。

ウォルツはその20年後、『国際政治の理論』(1979年) で、体系的理論を演繹的に仮定した。まず社会科学の理論とは何かを説明し（たとえば、「理論は法則を説明する」「ある境界づけられた活動領域について観念的に形成された図である」「理論とは、行動の規則性を説明し、相互作用するユニットによって生み出された結果が特定の範囲内に落ち着くことを予測するものである」）[65]、分析レベルの還元主義を批判する[66]（たとえば、帝国主義理論、ローズクランス、ホフマン、アロン、カプラン、モーゲンソー、キッシンジャーを批判した）[67]。

ウォルツは、システムの秩序原理としての無政府状態（アナーキー）[68]と

「自助（self-help）」のシステムを強調し[69]、「構造は淘汰する」[70]と指摘した。ウォルツのネオリアリズムは、システム・レベルの構造（秩序原理、ユニットの機能、能力分布の3枚で定義）を演繹的に仮定し[71]、（アナーキーの秩序原理と“like-unit”のユニットの機能は定数であるため）特に極構造の数で国際秩序の安定さを比較した。彼は、モーゲンソーら古典的リアリズムとは異なり、双極安定論を展開した[72]。

彼は、特にミクロ経済学のアナロジーを適応し[73]、経済学者のスミスの議論（市場の構造）[74]や社会学者のデュルケムの議論（社会の構造）[75]の影響が見られる。国家行動の枠組みを議論する上で、もはやルソーの「鹿狩りのディレンマ」に多くを依拠することとなく、国際政治のミクロ理論を構築した[76]。ルソーの「鹿狩りのディレンマ」については、1959年の『人間、国家、戦争』ですでに詳述されたからである[77]。また彼は改めて、相対的利得の重要性を論じ、国際協力はほぼ不可能であると指摘した[78]。こうして、ウォルツは、国際政治学を社会科学の一学問とした。議題設定したのである。「ウォルツとの対話」の時期へ入っていく[79]。

ウォルツによれば、彼の理論は、「対外政策の理論」ではなく、「国際政治の理論」であり、国際システム上の結果の幅広いパターンをただ説明しようとする試みである[80]。またウォルツによれば、「対外政策の理論」は、ユニット・レベルと国際システム・レベルの変数を含みうるし、含むべきであるという[81]。

ウォルツは、「体系的理論とは、政治であれ経済であれ、ある領域の組織化のあり方が、そのなかで相互作用するユニットに対し、いかに制約的もしくは促進的力として働くかを説明する理論である」と指摘する[82]。

また、「構造は本来、ある特定の結果を直接にもたらすものではない。構造はシステム内の行動に影響するが、その影響は間接的である。その影響は二通りの方法、すなわち、アクターの社会化と、アクター間の競争によってもたらされる」と述べ、「構造は一定の行動を奨励し、それに応えない行動に対して懲罰を加える」という[83]。

相対的利得の重視については、以下のような指摘も見られる。「国家が問わざるをえないのは、『どちらもいっしょに利益を得られるか』ではなく、『どちらの方がより多く利益を得るか』である。　…両者が大きな絶対的利得を得る見込みがある場合でも、増加した能力を相手国がどう使うかをそれぞれが恐れている限り、協力は引き出せない。注目すべきは、協力を拒んでいるのが当事者どちらかの性格や短期的意図ではない、という点である。安全が保障されない状況―少なくとも互いの将来の意図と行動が不確実な状況―が協力を拒むのである」[84)]。

ウォルツは、以下の通り、独自の勢力均衡の理論を描く。「勢力均衡理論は、行動と結果についての多くの期待を導く。この理論から予測されるのは、勢力均衡が国家行動の目的かどうかにかかわらず、国家はバランシング行動をとるだろうということである。そして、システムのなかの均衡へ向かう強い傾向を予測することもできる。これは、いったん達成された均衡が維持されることではなく、破壊されても均衡は何らかの仕方で回復されるという予測である。勢力均衡は繰り返し形成される。この理論は、国際政治を競争システムとして描くので、国家が競争者としての共通の特性を示すこと、つまり国家が互いを模倣し、システムに社会化されることを、より具体的に予測できる」[85)]。

ウォルツは、インサイド・アウトのパターンにしたがう還元主義の国際政治研究を批判する上で、以下の通り、手厳しい。「彼らは国際政治を、国家同士がどのような関係に位置づけられているかという観点からではなく、どのような国家がどう相互作用するかという観点から検証しているのである。そうすることで彼らは、C. F. A. パンティンの『分析の誤謬（analytic fallacy)』[86)] を犯している。すなわち、『より高位の配置がそれ自体研究されるべき特性を持っている可能性がある』と考えることなく、現象に関係する要因に研究を限定してしまっているのである」[87)]。

ウォルツが双極安定論をとることはすでに指摘したが、その主な理由は双極の方が多極の構造よりも不確実性が少なく誤認・誤算がより生じにくいか

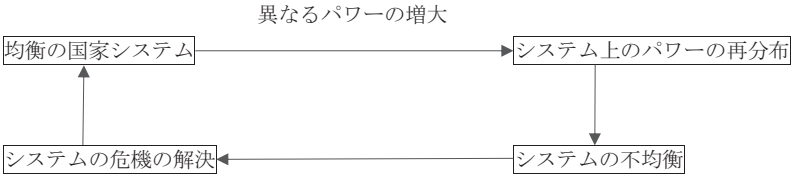
らであった。「対内的バランシングの方が対外的バランシングより、あてになるし正確である。国家は敵対する国家連合の力や信頼性を誤って判断することはあっても、自国の相対的国力を誤って判断することは少ないからである。不確実性と誤算は、国家を適度に警戒させたり、平和の機会を増やしたりするよりも、戦争の原因となる。しかし、双極世界においては、不確実性は少なく、計算は容易なのである」[88)]。

また彼は、意外にも、国家の合理性の前提に深いこだわりを持っていない。

そして彼はその後、核兵器による抑止は、「第二イメージ」だが、「システム上のエフェクト」を持つ、と議論するようになる[89)]。核兵器については、セーガンとの論文集が翻訳されている。また1979年の『国際政治の理論』の後、論文集の『リアリズムと国際政治』(2008年)をまとめている[90)]。

ウォルツとはやや異なるネオリアリズムを展開したのが、ギルピンである。ウォルツの議論のインパクトがたしかに大きかったが、国際システム・レベルの変化を説明しようとしたギルピンの分析の知的貢献を看過してはならない。ギルピンは、『世界政治における戦争と変化』(1981年)と『国際関係の政治経済学」(1987年)などを書き残し、覇権安定理論、つまり単極安定論を展開した。彼によれば、「軍事力や経済力、資源をコントロールする力のほぼすべてで圧倒的な力を持つ覇権国(hegemon)が存在すれば、国際公共財を提供し、国際(経済)秩序が安定する」。ところが、「覇権国のパワーが相対的に低下し、現状変革国家が出現すると国際秩序は不安定になる」と想

図1　覇権国の交代のサイクル



出典：Robert Gilpin, *War & Change in the World Politics*, Cambridge University Press, 1981, p. 12.

定する。ギルピンの議論は、同じネオリアリズムのウォルツと違って、変化を説明できるリアリズムであると言えよう[91)]。

ギルピンの理論上の大きな貢献は、国際システムの変化について3つのレベルを理念型として提示したことである。アクターの変化をともなうシステムそのものの変化（systems change）は、たとえば、古代から中世へ、中世から近代へと、歴史的に滅多に起こらない。そのため、システムの統治（governance）にかかわるシステム上の変化（systemic change）をいかに説明・分析するのかが重要となる。たとえば、多極か双極か、単極かという極構造にかかわる問題である。特にギルピンにとっては、多極から双極へ、そして単極へという議論ではなく、覇権国の交代の歴史が重要となる。こうして、国際システムのレベルの構造に注目する同じネオリアリズムだが、ウォルツは双極安定論をとり、ギルピンは単極安定論の立場をとった。

表1　国際システムの変化についての3つのレベル

システムそのものの変化（systems change）	…アクターの変化（帝国、国民国家など）
システム上の変化（systemic change）	…システムの統治（governance）
相互作用の変化（interaction change）	…国家間（interstate）のプロセス

出典：*Ibid.*, p. 12.

「ウォルツとの対話」と上述したが、ネオリベラリズムは（特にコヘインだが）、ウォルツの構造主義的リアリズムではなく、ギルピンの覇権安定理論に乗っかる形で、国際レジーム論を展開した。国際レジーム論は、覇権国のパワーの衰退後も、国際公共財としての国際レジームは「慣性（inertia）の法則」によりしばらく「残存」する、と論じたからである。直ちに国際秩序が不安定になるわけではないという論理である。媒介変数として国際レジームを想定したネオリベラリズムは、後に論じるネオクラシカル・リアリズムの誕生と発展に大きな示唆を与えることとなる[92)]。

第3節　アメリカのリアリズムの新展開―ネオリアリズムの分化へ

(1) 攻撃的リアリズム

ミアシャイマーは、『大国政治の悲劇［増補版］』（2014年）で、大国による覇権をめぐる相対的なパワーの極大化について議論を深めた。彼は、「無政府状態の国際システムの秩序原理から、国家としての『生き残り』を最優先する国家は（地域）覇権を実現するまでは安心しない」と想定する。また彼は、21世紀に米中両国が「ツキディディスの罠」へはまってしまうことを懸念する。

ミアシャイマーによれば、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの相違は、国家がどれだけのパワーを欲しがるのかである[93)]。

(2) 防御的リアリズム

防御的リアリズムは、無政府状態を比較的に緩く想定し、国家は「安全保障のディレンマ」が過度に高まる時に限って、攻撃的リアリズムが想定するような行動をとるのであって、通常はバランスを保とうとする、と議論する。国家の対外政策を、システム上の制約に対応した結果としての行動（natural conduct）として説明できる場合と、国内レベルや個人レベルの要因に基づく行動（unnatural conduct）として説明できる場合とに分けるのである。こうして、防御的リアリズムは、国家の対外行動を規定する独立変数として、国際システム・レベルの構造だけではなく、ユニット・レベルの国内要因、あるいは認識や誤認など個人レベルの要因を設定する。つまり、独立変数を使い分けるのである。そのため、次に見るネオクラシカル・リアリズムの立場からは、「後づけの理論」ではないかという批判を浴びることになる[94)]。

防御的リアリズムの研究業績としては、たとえば、ジャーヴィス『国際政治における認識と誤認』（1976年）や「安全保障のディレンマの下での協調」（1978年）、『システム・エフェクト』（1996年）、ウォルト『同盟の起源』（1987年）や『アメリカのパワーを飼いならせ』（2005年）、スナイダー『帝

国の神話』(1991年)、グレーサー「安全保障のディレンマ再考」(1997年)、ヴァン・エヴェラ『戦争の原因』(1999年)、ポーゼン『抑制』(2014年) などがある[95)]。

たとえば、ジャーヴィスによれば、国家は国際システムのインセンティヴに一致した行動をとるわけではない。国家は、ネオリアリストたちが「適切な」形式とみなす方法で国際システムの刺激に常に反応するわけではない。たとえ国家が国際システムのインセンティヴを適切に理解したとしても、政策決定者たちは常に国際システムのインセンティヴに合理的に反応するわけではないという[96)]。

またウォルトによれば、「勢力均衡 (BOP)」ではなく「脅威の均衡」であるという。ジャーヴィスと同じく、目に見えない側面に着目しているのである[97)]。また彼は、アメリカのグランド・ストラテジーとして、「エア・シー・バトル」構想ではなく、「オフショア・バランシング」戦略の必要性を説く[98)]。

表2　人間性リアリズムと防御的リアリズム、攻撃的リアリズムの理論

	人間性リアリズム	防御的リアリズム	攻撃的リアリズム
国家にパワーを求めさせる原因は何か？	国家に備わっているパワーへの欲望	国際システムの構造	国際システムの構造
国家はどれだけのパワーを欲しがるのか？	最大限得られるだけ。国家は相対的なパワーを最大化し、最終的な目標は覇権達成にある。	持っているもの以上のものは求めない。国家は既存の勢力均衡の維持に集中する。	最大限得られるだけ。国家は相対的なパワーを最大化し、最終的な目標は覇権達成にある。

出典：John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, Updated Edition, W.W. Norton & Company, 2014 [2001], p. 22.

(3) ネオクラシカル・リアリズム

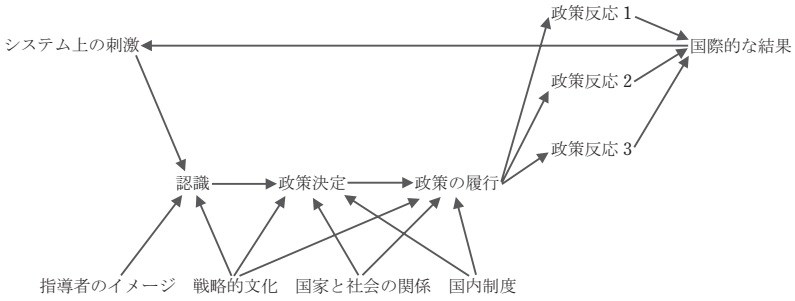
ネオクラシカル・リアリズムは、対外政策を異なる政策決定者がシステム上の制約を「主観的に」解釈し、異なる国内政治の構造に起因する動員能力に規定される形で進行されるものと捉える。

ネオクラシカル・リアリズムを＜発見＞したローズによれば、「ネオクラシカル・リアリズムは、国家の対外政策の範囲と野心は第一義的に国家の相対的な物理的パワーによって規定される、と主張する。しかし同時に、対外政策に対するパワーや能力のインパクトは、間接的で複雑である、と主張する。なぜならば、システム上の制約は、政策決定者の認識や国家構造といったユニット・レベルの媒介変数を通じて“翻訳”されるからである」[99)]。

ネオクラシカル・リアリズムと防御的リアリズムの相違としては、何を独立変数として設定するのかであり、因果関係の論理構造が異なる。前者のアプローチは、国家の対外政策やグランド・ストラテジーを説明する上で、システム・レベルの構造を独立変数としつつ、媒介変数として国内政治要因・個人要因を想定するのである。ネオクラシカル・リアリズムは、「国際政治の理論」ではなく「対外政策の理論」なのである。そのため、還元主義批判を避けることが可能となり、理論の正統性を守ることができる。

ローズによれば、ウォルツ流のネオリアリズムとコンストラクティヴィズムの中間的なアプローチであるという。こうして、コンストラクティヴィズムへの大胆な接近を見せるネオクラシカル・リアリズムは、変化を説明できるリアリズムである[100)]。

図２　対外政策のネオクラシカル・リアリストの理論



出典：Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, Steven E. Lobell, *Neoclassical Realist Theory of International Politics*, Oxford University Press, 2016, p. 59.

また、ネオクラシカル・リアリズムは、国内政治要因を再評価する。国内政治要因への大胆な接近である。クリステンセンによれば、ネオクラシカル・リアリズムは「国内政治が重要であることをただ主張するだけではなく、国内政治が重要となる条件を明細かつ具体的に指摘する」[101)]。エヴァンジェリスタによれば、「国際関係論でおそらく最も見込みのある進展は、対外政策のために国内的な要因で説明しようとする研究者たちの間で、国内要因の説明がまだ不十分である、という認識の広がりである。多くの研究者たちが、国際システム・レベルの要因と国内要因を自らの説明に組み込まなければならないこと、さらに『すべてが重要である』とただ主張するのではなく、より体系的な方法でそうする必要があることを理解している」という[102)]。

アメリカのネオクラシカル・リアリズムは、科学的なパラダイムを志向するが、ヨーロッパのネオクラシカル・リアリズムは、哲学的な伝統を重視する[103)]。後者のトジェとカンズは、カーやモーゲンソー、アロンなど古典的リアリズムを読み直す必要性を説く[104)]。

ネオクラシカル・リアリズムは、国際交渉と国内交渉を想定する政策決定理論であるパットナムの「2レベル・ゲームズ」の論理とも無関係ではない[105)]。また繰り返しになるが、独立変数である極構造の変化と従属変数であるユニットの相互作用との間に、国際レジームを媒介変数として設定するネオリベラリズムの国際レジーム論とも無関係ではないであろう。

ネオクラシカル・リアリズムの研究業績としては、たとえば、ローズの書評論文（1998年）による＜発見＞と『終戦論』（2010年）、芝崎厚士によるローズ書評論文の書評論文（1998年）、ブラウン・リンジョンズ・ミラー編『アナーキーの危機』（1995年）、クリステンセン『有益な敵』（1996年）、シュウェラー『致命的な不均衡』（1998年）、ウォルフォース『捉えどころのない均衡』（1993年）、ザカリア『富からパワーへ』（1998年）、レイン『幻想の平和』（2006年）、ロベル・リップスマン・タリアフェッロ編『ネオクラシカル・リアリズムと国家、対外政策』（2009年）、フレイバーグ＝イナン・ハリソン・ジェームズ編『国際関係のリアリズムを再考する』（2009年）、ブラ

ウレイ『グランド・ストラテジーの政治経済』(2010年)、ダイソン『ネオクラシカル・リアリズムと冷戦後ヨーロッパの防衛改革』(2010年)、トジェ・カンズ編『ヨーロッパ政治におけるネオクラシカル・リアリズム』(2012年)、メング『日中関係におけるナショナリズムと権力政治』(2014年)、ドュエック『オバマ・ドクトリン』(2015年) と『不承不承の十字軍戦士』(2016年)、リップスマン・タリアフェッロ・ロベル『国際政治のネオクラシカル・リアリズムの理論』(2016年)、ナリズニィ「システム上のパラダイムと国内政治に関して」(2017)、市原麻衣子『ソフト・パワーとしての日本の国際的な民主主義支援』(2017年)、ロサ『ネオクラシカル・リアリズムと中国の核ドクトリンの未発達』(2018年)、島村直幸『国際政治の<変化>を見る眼』(2019年)、寺田貴「米国のTPP離脱と日本の通商外交」(2023年) などがある[106)]。

攻撃的リアリズムや防御的リアリズム、ネオクラシカル・リアリズムをローズが比較したのが表3である。

表3　対外政策の4つの理論

理論	国際システム観	ユニット観	因果関係の論理
国内政治理論	重要ではない	高度に区別される	国内要因→対外政策
防御的リアリズム	時に重要; 無政府状態のインプリケーションは変化する	高度に区別される	システム上の　or 国内要因→対外政策 インセンティヴ
ネオクラシカル・リアリズム	重要; 無政府状態はあいまい	区別される	システム上の　→国内要因→対外政策 インセンティヴ (独立変数)　　(媒介変数)
攻撃的リアリズム	とても重要; 無政府状態はホッブス的	区別されない	システム上の　→対外政策 インセンティヴ

出典：Gideon Rose, “Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,” *World Politics*, Vol. 51, 1998, p. 154.

ネオクラシカル・リアリズムがすべての現実を説明できないことを示したのが表4である。

表4　ネオクラシカル・リアリズムと四つの世界

	脅威についての明らかな情報	脅威についての不明確な情報
政策の反応についての明らかな情報	世界1 リアリズムに一致。 国内のアクターは通常、政策のスタイルとタイミングに影響を及ぼす。 ネオクラシカル・リアリズムは、機能不全の行為を説明する上でのみ有用である。	世界4 リアリズムと不一致。 国内のアクターは国益を決定しうるが、政策の反応は国際制度によって大いに決定づけられる。 ネオクラシカル・リアリズムは、国家の行為を説明する上で有用ではない。
政策の反応についての不明確な情報	世界2 リアリズムに一致。 国内のアクターは、政策のスタイルとタイミングだけでなく、国際的な課題に対する政策の反応性質にも影響を及ぼすことができる。 ネオクラシカル・リアリズムは、国家の対外政策の選択肢を説明する上で有用である。	世界3 リアリズムと不一致。 国内のアクターは国益とそれに対する政策の反応を決定づける上で役立つ。 国内政治理論は、国家の行動を説明する上で、ネオクラシカル・リアリズムよりも有用である。

出典：Steven E Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press 2009, p. 283.

(4) 古典的リアリズムの再評価

ネオクラシカル・リアリズムと並行して、古典的リアリズムの読み直しも進んでいる。たとえば、ヴァスウェズ『国際関係の古典』(1996年) やウィリアムズ編『リアリズム再考』(2007年) がある[107)]。また繰り返しになるが、ネオクラシカル・リアリズムのトジェとカンズも、カーやモーゲンソー、アロンなどの古典的リアリズムを読み解く必要性を説いている。

おわりに―結論と問題提起

これまでの本稿の分析から導き出される結論は、いかなるものか―。それ

は、ささやかな結論に見えるかもしれないが、従来のアメリカのリアリズムの理解とは異なる点をいくつか指摘するものである。

第一に、アメリカの古典的リアリズムの誕生は、モーゲンソーやハーツ、キッシンジャー、ホフマン、ウォルファーズなど、主にユダヤ系亡命知識人によるヨーロッパ的リアリズムのアメリカへの導入であった。この点は、ニーバーやケナンなどアメリカ人のリアリズムの重要性を否定するものではない。すなわち、ニーバーやケナンも、特に近代以降のヨーロッパの国際政治から、自らの議論を組み立てた。そして、アメリカ外交の特異性に批判的な姿勢を見せたのである。

第二に、アメリカ独自のリアリズムは、ウォルツ以降のネオリアリズムである。また、『人間、国家、戦争』(1959年) の初期ウォルツは、第三イメージに注目する点で、すでにネオリアリズムであったと言えよう。注目すべきことに、ウォルツは、特定のイメージ（分析レベル）に特化し過ぎる弊害についても論じている。

社会科学の限界を認識し、行動科学革命に批判的であった初期ウォルツが、その後、科学的・合理的アプローチへと傾斜したのはなぜか、疑問が生じるかもしれない。しかし、ウォルツの議論は、1959年から1979年まで論理が一貫している。たとえば、第三イメージへの注目をはじめとして、アナーキーの秩序原理や「自助」のシステムの強調、相対的利得の重視、ルソーの「鹿狩りのディレンマ」やゲーム理論の適応などである。

第三に、リアリズムは、国際政治の変化を説明することが不得手であるが、ギルピンの覇権安定論やネオクラシカル・リアリズムは変化を説明できるリアリズムである。ただし、ギルピンを例外として、脱植民地化や相互依存の深化、グローバリゼーションなど趨勢（トレンド）的変化への関心は希薄である[108]。西欧国家体系と帝国主義世界体制、冷戦と脱植民地化の二重構造への関心も希薄である[109]。

第四に、「21世紀の国際秩序が単極から多極へ移行しつつある状況下で、リアリズムは復権しつつある」(トジェ・カンズ)[110]という議論や、「地政学

が復活した」、「アメリカ中心のリベラルな国際秩序は崩壊した」（ミアシャイマーやミード、アチャリア、ポーゼン、アリソン、ベースヴィッチ、ファーガソン、ケーガン、ラックマンなど）という議論もある[111)]。「第5の論争」へと至るのであろうか―。

こうした議論に対して、ネオクラシカル・リアリズムのローズは、「埋め込まれた自由主義2.0」でリベラルな国際秩序を再構築する必要性を説く。「埋め込まれた自由主義」とは、コンストラクティヴィズムのラギーの議論で、第二次世界大戦終結時に新たな覇権国のアメリカと西ヨーロッパ諸国との間で、国内の完全雇用の実現や福祉のセーフティー・ネットを張ることを前提として、戦後の自由貿易の拡大を漸進的に進めていくという妥協・取り引きであったという点を明らかにした概念である。ローズは、21世紀はじめの現代グローバリゼーションが国内で福祉のセーフティー・ネットがないまま急速に進展し、その結果、国内で貧富の格差が極端に拡大し、中間層が没落して、民主主義が後退し、権威主義やポピュリズムが台頭する現状を憂いているのである。国内政治要因の重視から出てくる議論であると言ってよい[112)]。

以上、これまでの本稿の分析から明らかになった点は少なくないが、分析が不十分で今後の研究課題として残された点もある。以下、問題提起として、要点を列挙する。

第五に、E.H. カー『危機の20年』（1939年）とモーゲンソー『科学的人間と権力政治』（1946年）との＜対話＞をいかに捉えるかである。『危機の20年』と1948年の『国際政治』との比較は研究がある[113)]。

第六に、シューマン『国際政治』（1933年）とモーゲンソー『国際政治』（1948年）との＜対話＞をいかに捉えるかである[114)]。

第七に、アレントの『全体主義の起源』（1951年）やポラニーの『大転換』（1944年）など、ユダヤ系亡命知識人らの国際関係論のリアリズムへの影響をいかに理解するのかである。たとえば、アレントは、ナチズムと共産主義を等しく「全体主義」と捉える論理を提示した。ポラニーは、ネオリアリズ

ムのウォルツやコンストラクティヴィズムのラギーなどに影響を及ぼした[115]。これら以上のことが、はたして言えるのか？

第八に、アメリカのリアリズムと戦前の地政学（マハンやマッキンダー、スパイクマン）との接点と境界線（相違点）をいかに理解するのかである[116]。

第九に、ネオクラシカル・リアリズムのアプローチをウォルツはいかに捉えていたのか。ネオクラシカル・リアリズムは、「国際政治の理論」ではなく、「対外政策の理論」である。「対外政策の理論」にすぎないと切り捨てていた可能性が高いが、ウォルツの還元主義批判は免れると考えられる。

第十に、アメリカのロックのリベラルな思想的ルーツと、ホッブスやマキャベリ、ルソーらリアリズムの思想的ルーツは、いかに調和するのか（しないのか）[117]。アメリカの建国の父たちは、ロックのリベラルな思想に強く影響を受けていたと一般的に考えられているが、アメリカ独立戦争の時に、建国の父たちは、ヨーロッパの国際秩序の現実を正しく把握し、宗主国イギリスのライバル国のフランスと同盟を結ぶことを躊躇なく選択するリアリストであった。また、アメリカ合衆国憲法で導入された「権力の分立」と「抑制と均衡（check and balance）」の政治原則にも、マキャベリなどリアリズムの発想が強く反映されていると言ってよい[118]。

第十一に、国際レベルのリアリズムとリベラリズム、国内レベルの保守とリベラルとの関連をいかに理解するのかである。1970年代までの「外交エスタブリッシュメント」は、共和党穏健派と民主党保守派であり、古典的リアリズムの立場をとっていた。「死活的中道（vital center）」へと求心力が働き、超党派外交も可能であった。

ところが、アメリカは、2000年代前半のネオコンと共和党保守派との結託で、「先制」でイラク戦争へ踏み切った。国内政治では保守とリベラルのイデオロギーの分極化と二大政党の勢力伯仲が見られ、外交エスタブリッシュメントの影響力は低下し、カプチャンらによれば、保守とリベラルで遠心力が働き、「中道の死（dead center）」へと至ってしまっている[119]。

＜補論＞　アメリカ以外のリアリズムーヨーロッパと日本の事例

アメリカのリアリズムの独自性をより深く理解するためには、本稿の「おわりに」の最後に列挙した問題提起に真正面から取り組む以外に、アメリカのリアリズムをヨーロッパや日本、中国、インドなどのリアリズムと比較する必要がある。しかし、そのためには複数の言語能力を必要とするため、一人の研究者では通常、きわめて困難な課題である。本稿の筆者も、その例外ではない。ただし、それぞれの国家の理論や歴史を専門にする研究者の研究成果を手がかりに簡単なスケッチを描くことはできるかもしれない。優れた翻訳書も、大いに手助けとなるであろう。

以下では、あくまでも補論として、比較的に先行研究があるヨーロッパと日本のリアリズムの独自性とアメリカのリアリズムとの相違について、簡単なスケッチを描いてみたい。

(1) イギリスのリアリズム

E.H. カーは、『危機の20年』（1939年）で、戦間期のユートピアニズムを批判し、まずリアリズムの必要性を説いたが、学問の健全なアプローチとしてリアリズムとユートピアニズムの調和、「秩序」と「道義」の問題の調和が必要であると結論づけた。その上で、「持てる者（have）」と「持たざる者（have not）」との間で「平和的変革（peaceful change）」が実現されなければ、戦間期が「危機の20年」で終わってしまうと政策提言した。国際政治学をイギリスではじめて体系化した。議題設定したのである。「カーとの対話」の時期へ突入する[120]。

たとえば、英米の「特別な関係」の（再）構築やイギリスの脱植民地化政策の戦略性などの事例に、イギリスのリアリズムの影響を見ることができる[121]。

ところが、その後、イギリスではカー流のリアリズムが主流となることはなく、英国学派の「国際社会」論が発展を遂げていく。たとえば、ブルは、国際社会と国際システムを区別した。また彼は、外交や国際法、勢力均衡

（BOP）、大国間政治、戦争を国際社会を維持するための国際制度と捉えた。英国学派には、モーゲンソーへの反発があり（初期ウォルツを評価、後期ウォルツは無視）、歴史をより重視するアプローチをとった。そのため、個人芸・職人芸とならざるをえない。英国学派の思想的なルーツは、グロティウスである。

英国学派の研究業績としては、たとえば、バターフィールド・ワイト編『外交の探求』（1966年）、ブル『アナーキーな社会』（1977年）やブル・ワトソン編『国際社会の拡大』（1984年）、ワイト『国際理論』（1991年）と『パワー・ポリティクス』（1995年）、メイヨール『世界政治』（2000年）、リンクレーターとスガナミ『国際関係の英国学派』（2006年）、スガナミ『国内類推と世界秩序計画』（2008年）、ブザン『国際関係の英国学派のイントロダクション』（2014年）などがある[122]。

リアリズムへのオルターナティブとしての国際政治経済学（IPE）が、ストレンジの『カジノ資本主義』（1986年）や『国家と市場』（1988年）、『国家の退場』（1996年）、『マッド・マネー』（1998年）、『国際政治経済への道』（2011年）といった一連の研究業績で発展を遂げた。国際レベルで国家と市場、政治と経済の重なり合う部分を説明するのである。こうして、彼女は、国際政治経済学をはじめて体系化した[123]。また、「構造的パワー」と「相対的パワー」を区別し、パワー概念の精緻化へとつながった[124]（ほぼ同じタイミングで、ナイが「ソフト・パワー」の概念を提示する[125]）。

(2) フランスのリアリズム

フランスのリアリズムは、アロンの『平和と戦争』（1961年）や『帝王的共和国』（1974年）、『戦争を考える』（1976年）のインパクトが絶大であり、モーゲンソーへの反発が強かった（初期ウォルツを評価、後期ウォルツは無視）。社会学と歴史の重視が特徴である。個人芸・職人芸にならざるをえない。ただし、国際政治を闘争状態と位置づけ、主権国家を主要な行為主体とし、勢力均衡（BOP）を国際秩序の手段とするなど、モーゲンソーの理論を

一部受容した。他方で、アロンは、モーゲンソーの理論が過度な合理主義的鳥瞰図になっており、国家が追求する目標としての国益を過度に重視していることを批判した。また国家の目標としては、パワーだけではなく、思想の普及や偉大さの追及なども考慮すべきと論じた[126)]。

さらにアロンは、モーゲンソーが国際システムを双極か多極かで捉えた点を批判し、文明を根拠として同質的システムと異質的システムの区分を問題提起した。また、国際関係論と歴史的事実を架橋するのが社会学に他ならないと論じた。「システムによってアクターが規定されてきたというよりも、主要なアクターがシステムを規定してきた」という立場をとった（インサイド・アウトの説明）[127)]。

たとえば、ド・ゴール大統領の「緊張緩和（détente）」政策へ影響を及ぼしたと考えられる[128)]。

思想的ルーツは、政治思想家のモンテスキューやトクヴィル、社会学者のデュルケムなどである。

歴史家のルヌーヴァンやデュロゼルも、モーゲンソーの理論に批判的で、経済や自然、心性を含めた「全体史」の叙述にあたり、政策決定者の政策決定に影響を及ぼす「深層の諸力」として、地理や人口、経済、国民意識など、多様な要素を検証して捉えるべきであると論じた[129)]。

(3) ドイツのリアリズム

ドイツの国際関係論は、ナチズムの反省からリベラリズムと理論研究へ傾斜した。たとえば、地域統合論や批判的平和研究、国際レジーム論、シヴィリアン・パワー論、グローバル・ガヴァナンス論などである。ドイツの国際関係論で、リアリズムは周辺的な存在であった。たとえば、マサラやリンク、キンダーマン、ハッケなどである。特にハッケは、第一にドイツの国際関係論の「無歴史性（歴史研究そのものの不足）」と、第二にドイツにおける知的伝統の軽視を問題視した。たとえば、戦略家のクラウゼヴィッツ、歴史家のランケとマイネッケ、社会学者のウェーバーとハーバーマス、政治学者の

シュミットらは、アメリカのモーゲンソーに影響を及ぼしたと考えられる。ドイツには、地政学の伝統もあった[130)]。

こうしたリアリズムの研究と現実の対外政策との接点だが、たとえば、（メッテルニヒ外交と）ビスマルク外交の歴史的実践、ナチズムと第三帝国、アデナウアーによる同盟内政治、「諦めの政策」としてのブラント＝バールの東方政策（オストポリティーク）、コール＝ゲンシャーのドイツ統一交渉などに影響を及ぼしたと考えられる[131)]。

(4) 日本のリアリズム

日本のリアリズムは、アメリカの古典的リアリズムやイギリスとフランスのリアリズムと同じく、近代ヨーロッパの「古典外交」を肯定的に評価した。アメリカの没歴史のリアリズムに批判的であり、歴史の重視が特徴である。個人芸・職人芸にならざるえない。特にリベラリズムの理論研究に傾斜した同じ敗戦国のドイツと対照的である。

研究業績としては、たとえば、岡義武『国際政治史』（1955年）、高坂正堯『海洋国家日本の構想』（1965年）や『国際政治』（1966年）、『古典外交の成熟と崩壊』（1978年）、『平和と危機の構造』（1995年）、永井陽之助『平和の代償』（1966年）や『冷戦の起源』（1978年）、『時間の政治学』（1979年）、『現代と戦略』（1985年）、『二〇世紀の遺産』（1985年）、モーゲンソーの翻訳者としての原彬久、原彬久『国際政治分析』（1993年）、村田晃嗣『大統領の挫折』（1998年）や『レーガン』（2011年）、石井修『国際政治史としての二〇世紀』（2000年）や『権力の翳り』（2015年）、中西寛『国際政治とは何か』（2003年）、納家政嗣『国際紛争と予防外交』（2003年）、土山實男『安全保障の国際政治学』（2004年）、鈴木基史『平和と安全保障』（2007年）、細谷雄一『外交』（2007年）や『国際秩序』（2011年）、ウォルツの翻訳者としての岡垣知子、岡垣知子『国際政治の基礎理論』（2021年）などがある[132)]。

こうしたリアリズムの研究と現実の対外政策との接点だが、たとえば、1972年日中国交正常化、1970年代後半の「福田ドクトリン」や「総合安全保

障」のアプローチ、1980年代の中曽根外交、1990年代半ばの橋本外交、2000年代の小泉外交と安倍外交（「自由と繁栄の孤」）、2010年代の安倍外交（「積極的平和主義」と「地球儀を俯瞰する外交」、集団的自衛権の行使容認、「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」）などに影響を及ぼしたと考えられる[133)]。

1）Kenneth N. Waltz *Man, the State and War: A Theoretic Analysis*, Columbia University Press, 1959, 238.

2）Steven E Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press 2009, p. 1.

3）島村直幸『国際政治の＜変化＞を見る眼―理論・歴史・現状』晃洋書房、2019年、1-6頁。

4）「本書の有効性は、それが一般原理を扱っているが故に、ある特定の文化ないしある特定の地理的領域によって制約されるということはない。また本書は、それが生まれたアメリカの対外政策に関心を持つだけではなく、文化的・地理的境界を超える普遍的な論点及び問題とも取り組んでいるのである」モーゲンソー（原彬久訳）『国際政治―権力と平和』岩波文庫、2013年、日本語版の序文（14頁）。

5）Lewis A. Coser, *Refugee Scholars in America, Their Impact and Their Experience*, Yale University Press, 1984; Walter Isaacson, *Kissinger: A Biography*, Simon & Schuster Publishers, 1992. 古典的リベラリストのハースやドイッチェもユダヤ系亡命知識人であった。

6）Hans J. Morgenthau, *Scientific Man vs. Power Politics*, The University of Chicago Press, 1946.　デーヴィッド・ロング、ピーター・ウィルソン（宮本盛太郎、関静雄訳）『危機の20年と思想家たち―戦間期理想主義の再評価』ミネルヴァ書房、2002年も参照。

7）Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Fifth Edition, Revised, Alfred. A. Knopf, 1978[1948], p. 5. 原彬久『国際政治分析―理論と現実』新評論、1993年も参照。

8）Morgenthau, *ibid.*

9）Chris Brown, "'The Twilight of International Morality'?: Hans J. Morgenthau and Carl Schmitt on the End of the Jus Publicum Europaeum," Michael C. Williams, ed., *Realism Reconsidered: The Legacy of Hans J. Morgenthau in*

International Relations, Oxford University Press, 2007, pp. 42-61: William E. Scheuerman, "Caul Schmitt and Hans Morgenthau: Realism and Beyond," Michael C. Williams, ed., *Realism Reconsidered: The Legacy of Hans J. Morgenthau in International Relations*, Oxford University Press, 2007, pp. 62-92; カール・シュミット（権左武志訳）『政治的なるものの概念』岩波文庫、2002年; 山崎望「徘徊するシュミットとマルクスの亡霊」『国際政治（特集：冷戦と日本外交）』第209号、2023年、163-172頁; 蔭山宏『シュミット―ナチスと例外状況の政治学』中公新書、2020年；仲正昌樹『カール・シュミット入門講義』作品社、2013年; 野口雅弘『マックス・ウェーバー―近代と格闘した思想家』中公新書、2020年; 山之内靖『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書、1997年; 中野敏男『ヴェーバー入門―理解社会学の射程』ちくま新書、2020年; 仲正昌樹『マックス・ウェーバーを読む』講談社現代新書、2014年；三上剛史『道徳回帰とモダニティ―デュルケムからハバーマス、ルーマンへ』恒星社厚生閣、2003年。

10）Chris Brown, Terry Nardin, and Nicholas Rengger, eds., *International Relations in Political Thought: Texts from the Ancient Greeks to the First World War*, Cambridge University Press, 2002; Beate Jahn, ed., *Classical Theory in International Relations*, Cambridge University Press; John A. Vasquez, *Classics of International Relations*, Third Edition, Prentice Hall, 1996［1986］.

11）Thucydides, Translated by Jowett, *History of Peloponnesian War*, Second Edition, Oxford University Press, 1990, Ⅰ, par. 23.

12）Walz, *op.cit*., p. 159.

13）カント（宇都宮芳明訳）『永遠平和のために』岩波文庫、1985年; ジョン・ロック（加藤節訳）『完訳 統治二論』岩波文庫、2014年; G. John Ikenberry, *A World Safe for Democracy: Liberal Internationalism and the Crises of Global Order*, Yale University Press, 2020. Richard Tuck, *The Rights of War and Peace: Political Thought and the International Order from Grotius to Kant*, Oxford University Press, 1999; 富田恭彦『ロック入門講義―イギリス経験論の原点』ちくま学芸文庫、2017年; 加藤節『ジョン・ロック―神と人間の間』岩波新書、2018年も参照。

14）John C. Farrell and ASA P. Smith, eds., *Theory and Reality in International Relations*, Columbia University Press, 1967.

15）Paul R. Viotti and Mark V. Kauppi, *International Relations Theory: Realism, Pluralism, and Globalism*, Macmillan, 1987.

16）Robert O. Keohane and Joseph S. Nye, Jr., *Transnational Relations and World Politics*, Harvard University Press, 1971.

17）Robert O. Keohane and Joseph S. Nye, Jr., *Power and Interdependence*, Fourth Edition, Longman, 2011［1977］.

18）Immanuel Wallerstein, *World-Systems Analysis: An Introduction*, Duke University Press, 2007.

19）仲正昌樹『マルクス入門講義』作品社、2020年；熊野純彦『マルクス―資本論の哲学』岩波新書、2018年を参照。

20）Robert O. Keohane, ed., *Neorealism and Its Critics*, Columbia University Press, 1986; David A. Baldwin, ed., *Neorealism and Neoliberalism: The Contemporary Debate*, Columbia University Press, 1993.

21）Richard Ned Lebow and Thomas Rissee-Kappen, eds., *International Relations Theory and the End of the Cold War*, Columbia University Press, 1995.

22）Gideon Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," *World Politics*, Vol. 51, 1998, 148-151; 島村、前掲書、特に16-26頁。

23）Alexander Wendt, *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press, 1999; John Gerald Ruggie, *Constructing the World Polity: Essays on International Institutionalization*, Routledge, 1998; Cokin Wight, *Agents, Structures and International Relations: Politics as Ontology*, Cambridge University Press, 2006; Peeter J. Katzenstein, ed., *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, Columbia University Press, 1996; Henry R. Nau, *At Home Abroad: Identity and Power in American Foreign Policy*, Cornell University Press, 2002; Lebow and Rissee-Kappen, eds., *op.cit.*; 大矢根聡編『コンストラクティヴィズムの国際関係論』有斐閣、2013年；政所大輔「コンストラクテビズム―世界は『社会的に構築』できる？」草野大希、小川裕子、藤田泰昌編著『国際関係論入門』ミネルヴァ書房、2023年、118-142頁。

24）Michael E. Brown, Owen R. Cote, Jr., Scan M. Lynn-Jones, and Steven e. Miller, eds., *Rational Choice and Security Studies*, The MIT Press, 2000; Stephen Van Evera, *Guide to Methods for Students of Political Science*, Cornell University Press, 1997; Robert Powell, *In the Shadow of Power*, Princeton University Press, 1999; James D. Fearon, "Bargaining, Enforcement, and International Cooperation," *International Organization*, Vol. 52, 1998, pp. 269-305; James D. Fearon, "Rationalist Explanation for War," *International Organization*, Vol. 49, 1995, pp. 379-414; James D. Fearon, "Signaling versus the Balance of Power and Interest," *Journal of Conflict Resolution*, Vol. 38, 1994, pp. 236-269; 鈴木基史『国際関係』東京大学出版会、2000年；中村長史「ラショナリズム」草野、小川、藤田編著、同上、96-117頁；富永健一『現代の社会科学者―現代社会科学における実証主義と理念主義』講談社学術文庫、1993年。

25）Thomas C. Schelling, *The Strategy of Conflict*, Harvard University Press, 2021 [1960].

26）*Ibid*; Micheal Joseph Smith, *Realist Thought, from Weber to Kissinger*, Louisiana

State University Press, 1990; Steven J. Bucklin, *Realism and American Foreign Policy: Wilsonians and the Kennan-Morgenthau Thesis*, Praeger, 2001; Bruce Kuklick, *Blind Oracles: Intellectuals and War from Kennan to Kissinger*, Princeton University Press, 2006; Raymond Tanter and Richard H. Ullman, *Theory and Policy in International Relations*, Princeton University Press, 1974; 青野利彦、倉科一希、宮田伊知郎編著『現代アメリカ政治外交史―「アメリカの世紀」から「アメリカ第一主義」まで』ミネルヴァ書房、2020年。

27）同上；島村、前掲書、終章；島村直幸『＜抑制と均衡＞のアメリカ政治外交―歴史・構造・プロセス』ミネルヴァ書房、2018年、第14章、終章。

28）John Lewis Gaddis, *Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War*, Oxford University Press, 1987. John Lewis Gaddis, *The United States and the End of the Cold Warr: Implications, Reconsiderations, and Provocations*, Oxford University Press, 1992も参照。

29）Colin Elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Bridges and Boundaries: Historians, Political Scientist, and the Study of International Relations*, The MIT Press, 2002; John Lewis Gaddis, *Landscape of History: How Historians Map the Past*, Oxford University Press, 2002; Richard E. Neustadt and Ernest R. May, *Thinking in Time: The Uses of History for Decision Maker*, Free Press, 1988; Marc Trachtenberg, *The Craft of International History: A Guide to Method*, Princeton University Press, 2006; Ernest R. May, Richard Rosecrance, and Zara Steiner, *History and Neorealism*, Cambridge University Press, 2010; Paul Gordon Lauren, Gordon A. Craig, and Alexander L. George, *Force and Statecraft: Diplomatic Challenges of Our Time*, Fifth Edition, Oxford University Press, 2014［1983］. 大矢根聡編『国際関係理論と日本外交史―「分断」を乗り越えられるか』勁草書房、2020年；大矢根聡編著『戦後日本外交かみる国際関係―歴史と理論をつなぐ視座』ミネルヴァ書房、2021年；川崎剛『社会科学としての日本外交研究―理論と歴史の統合をめざして』ミネルヴァ書房、2015年；保城広至『歴史から理論を想像する方法―社会科学と歴史学を統合する』勁草書房、2015年も参照。

30）Hans J. Morgenthau, *In Defense of the National Interest*, Alfred Knopf, 1951; Hans J. Morgenthau, *American Foreign Policy: A Critical Examination*, Methuen & Co. Ltd, 1952; Hans J. Morgenthau, *The Purpose of American Politics*, Alfred A. Knopf, 1960; Hans J. Morgenthau, *Politics in the 20th Century, Volume Ⅱ, The Impasse of American Foreign Policy*, University of Chicago Press, 1962; Hans J. Morgenthau, *A New Foreign Policy for the United States*, 1969; Hans J. Morgenthau, *Politics in the Twentieth Century*, Adridged Edition, 1971. M. Neacsu, *Hans J. Morgenthau's Theory of International Relations: Disenchantment and Re-Enchantment*, Palgrave Macmillan, 2009 ; Cornelia Navari, ed., *Hans J.*

Morgenthau and the American Experience, Macmillan, 2018; 原、前掲書; 宮下豊『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』大学教育出版、2012年も参照。

31) Morgenthau, *Politics among Nation*.

32) George F. Kennan, *American Diplomacy*, Expanded Edition, The University of Chicago Press, 1984[1951]: George F, Kennan, *Realities of American Foreign Policy*, Princeton University Press, 1954. Anders Stephanson, *Kennan and the Art of Foreign Policy*, Harvard University Press, 1989; Walter L. Hixson, *George F. Kennan: Cold War Iconoclast*, Colombia University Press, 1989; Wilson D. Miscamble, C. S. C., *George F. Kennan and the Making of American Foreign Policy, 1947-1950*, Princeton University Press, 1992; John Lewis Gaddis, *George F. Kennan: An American Life*, Penguin Books, 2011も参照。

33) Reinhold Niebuhr, *Beyond Tragedy: Essays on the Christian Interpretation of Tragedy*, Charles Scribner Son, 1937; Reinhold Niebuhr, *Christianity and Power Politics*, Charles Scribner's Press, 1940; Reinhold Niebuhr, *The Irony of American History*, University of Chicago Press, 2008[1952]; Reinhold Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems*, Charles Scribner's Press, 1953; Reinhold Niebuhr, *Moral Man and Immoral Society: A Study in Ethics and Politics*, Westminster John Knox Press, 2021[1960].

34) Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems*, p. 101.

35) Niebuhr, *Christianity and Power Politics*, p. 4.

36) Guilherme Marques Pedro, *Reinhold Niebuhr and International Relations Theory: Realism beyond Thomas Hobbes*, Routledge, 2021[2018].

37) John. H. Herz, "Idealist Internationalism and Security Dilemma," *World Politis*, Vol. 2, 1950, pp. 157-180; John. H. Herz, *Political Realism and Political Idealism*, University of Chicago Press, ch. ii, sec. ii. John H. Herz, *International Politics in the Atomic Age*, Columbia University, 1959年も参照。

38) Henry A. Kissinger, *White House Years*, Little, Brown and Company, 1979; Henry A. Kissinger, *Years of Upheaval*, Little, Brown and Company, 1982.

39) Henry A. Kissinger, *A World Restored: Metternich, Castlereagh and the Problems of Peace 1812-1822*, Houghton Miffrin, 1957; Henry A. Kissinger, *Nuclear Weapons and Foreign Policy*, Routledge, 1984[1957]; Henry A. Kissinger, *American Foreign Policy*, Third Edition, W. W. Norton & Company, 1977[1969]; Henry A. Kissinger, *Diplomacy*, A Touchstone Books、1994; Henry A. Kissinger, *Does America Need a Foreign Policy?: Toward a Diplomacy for the 21st Century*, A Touchstone Books, 2001; Henry A. Kissinger, *On China*, Penguin Books, 2012; Henry A. Kissinger, *World Order: Reflections on the Character of Nations and the Course of History*, Penguin Books, 2015. Isaacson, *op.cit*.も参照。

40）Kissinger, *A World Restored*, pp. 316-320.

41）*Ibid*.

42）Kissinger, *Diplomacy*.

43）Stanley Hoffmann, *Contemporary Theory in International Relations*, Greenwood Press, Publishers, 1960; Stanley Hoffmann, *The State of War: Essay on the Theory and Practice of International Politics*, Praeger, 1965; Stanley Hoffmann, *Gulliver's Troubles, or the Setting of American Foreign Policy*, Mcgraw-Hii Company, 1968; Stanley Hoffmann, *Primacy or World Order: American Foreign Policy since the Cold War*, Mcgraw-Hii Company, 1978; Stanley Hoffmann, *Duty beyond Borders: On the Limits and Possibilities of Ethical International Politics*, Syracuse University Press, 1981; Stanley Hoffmann, *Dead Ends: American Foreign Policy in the New Cold War*, Ballinger, 1983; Stanley Hoffmann, *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics*, Routledge, 1987; Stanley Hoffmann, *World Disorders: Troubled Peace in the Post-Cold War Era*, Rawman & Littlefield, 2000; Stanley Hoffmann, *Gulliver Unbound: America's Imperial Temptation and the War in Iraq*, Rawman & Littlefield, 2004; Stanley Hoffmann, *Chaos and Violence: What Globalization, Failed States, and Terrorism Mean for U.S. Foreign Policy*, Rawman & Littlefield, 2006; スタンレー・ホフマン（中本義彦編訳）『スタンレー・ホフマン国際政治論集』勁草書房、2011年。

44）Stanley Hoffmann, "Europe's Identity Crisis between the Past and America," *Deadalus*, Vol. 93, 1964 Fall, p. 1269.

45）Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, McGraw-Hill, 1979, pp. 43-49, esp. 45-46.

46）Hoffmann, *Gulliver's Troubles, or the Setting of American Foreign Policy*, pp. 23. 30; *Ibid*., p. 46.

47）Stanley Hoffmann, "Rousseau on War and Peace (1963)," Hoffmann, *The State of War*, p. 25.

48）Jean Jacques Rousseau "A Discourse on Political Economy (1762)," Jean Jacques Rousseau, Translated by G. D. H. Cole, *The Social Contract and Discourses*, Everyman's Libraty Edition, E. P. Dutton and Co., 1950［1762］, pp. 290-291.

49）Waltz, *Theory of International Politics*, p. 47; Waltz, *Man, the State and War*, pp. 145-186.

50）ケネス・ウォルツ（渡邉昭夫、岡垣知子訳）『人間・国家・戦争』勁草書房、2013年、1-2頁。

51）Jean Jacques Rousseau, Translated by C. E. Vaughan, *A Lasting Peace through Federation of Europe and the State of War*, Constable Co., 1917［1756］;

Rousseau, *op.cit*.; Emile Durkheim, Translated of 8th Edition by Sarah Solovay and John Mueller, *The Rule of Sociological Method*, Free Press, 1938[1895]. ジャン＝ジャック・ルソー（ブレーズ・パコフェン、セリーヌ・スペクトール監修、ブリュノ・ベルナルディ、ガブリエ・シルヴェストリーニ編、永見文雄、三浦信孝訳）『ルソーの戦争/平和論―『戦争法の諸原理』と『永久平和論抜粋・批判』勁草書房、2020年；鳴子博子『ルソーの政治経済学―その現代的可能性』晃洋書房、2023年；桑瀬章二郎『ジャン＝ジャック・ルソー―「いま、ここ」を問いなおす』講談社現代新書、2013年も参照。

52）Waltz, *Man, the State and War*, p. 7.

53）*Ibid*., p. 188.

54）*Ibid*., p. 120.

55）*Ibid*., pp. 231-232.

56）*Ibid*., chs. 6-7.

57）ウォルツ、前掲書、5-6頁。

58）Waltz, *Man, the State and War*, chs. esp. 6-7.

59）*Ibid*., p. ch. 3.

60）*Ibid*., p. chs. 3, 5.

61）*Ibid*., p. 198.

62）*Ibid*., p. 210.

63）*Ibid*., pp. 200-208

64）*Ibid*., p. 238.

65）Waltz, *Theory of International Politics*, ch. 1.

66）*Ibid*., ch. 2.

67）*Ibid*., chs. 3-4.

68）*Ibid*., ch. esp 6.

69）*Ibid*., pp. 72, 91, 105-107, 111, 118-119, 138, 155, 163, 175, 195.

70）*Ibid*., p. 92.

71）*Ibid*., pp. 88-191, esp. 100-101.

72）Waltz, *Theory of International Politics*, chs. 7-9.　Kenneth N. Waltz, *Realism and International Politics*, Routledge, 2008, ch. 8.　岡垣知子『国際政治の基礎理論』青山者、2021年、第8章；西田竜也「リアリズム―ジャングルの世界の権力闘争？」草野、小川、藤田編著、前掲書、43-69頁も参照。

73）Waltz, *Theory of International Politics*, pp. 89, 91, 93-94, 104-110.

74）*Ibid*., pp. 10, 76, 89-90, 141.

75）*Ibid*., pp. 104, 115n, 121, 197.

76）*Ibid*., pp. 47-48.

77）Waltz, *Man, the State and War*, pp. 4f, 161, 165-186, 180f, 231.

78）Waltz, *Theory of International Politics*, pp. 105-106. ただし、ウォルツは、「国際関係の管理」を論じた最終章の冒頭で、以下の通り、指摘する。「現在は違う。自助システムのおいては大国の勢力均衡が安定し国家能力の分布が極端に隔たっているので、絶対的利得への関心が相対的利得についての懸念にとって代わることもある。そういった場合、恵まれた立場にある国家は、たとえ他国が極端に多くの利得を得たとしても、率先して公共努力を行ったり、それに協力することもあるのである」。Ibid., p. 195.

79）Keohane ed., *op. cit*.; Baldwin, ed., *op. cit*.

80）Waltz, *Theory of International Politics*, pp. 71-72, 121-122, 174-175; Waltz, *Man, the State and War*, p. 238; ケネス・ウォルツ（河野勝、岡垣知子訳）『国際政治の理論』勁草書房、2010年、日本語版への序文（v頁）；ウォルツ『人間・国家・戦争』、2001年版への序文（5頁）。Kenneth N. Waltz, *Foreign Policy and Democratic Politics: The American and British Experience*, Institute of Governmental Studies Press, 1967も参照。

81）Waltz, *Theory of International Politics*, pp. 174-175; ウォルツ『国際政治の理論』。

82）*Ibid*., p. 72.

83）*Ibid*., p. 106.

84）*Ibid*., p. 105.

85）*Ibid*., p. 128; Waltz, *Realism and International Politics*, Routledge, ch. 10.

86）Waltz, *Theory of International Politics*, p. 64.

87）C. F. A. Pantin, *The Relations between the Sciences*, Cambridge University Press, 1968, p. 175.

88）Waltz, *Theory of International Politics*, p. 168.

89）Waltz, *Realism and International Politics*, chs. 17-18; スコット・セーガン、ケネス・ウォルツ（川上高司監訳、斎藤剛訳）『核兵器の拡散―終わりなき論争』勁草書房、2017年。

90）*Ibid*. Barry Buzan, Charles Jones, and Richard Little, *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*, Columbia University Press, 1993も参照。

91）Robert Gilpin, *War & Change in the World Politics*, Cambridge University Press, 1981. Robert Gilpin, *The Political Economy of International Relations*, Princeton University Press, 1987; Robert Gilpin, *The Challenge of Global Capitalism: The World Economy in the 21st Century*, Revised Edition, Princeton University Press, 2002[2000]; Robert Gilpin, *Global Political Economy: Understanding the International Economic Order*, Princeton University Press, 2001; Wolfgang Danspeckgruber, *Robert Gilpin & International Relations: Reflections*, Liechtenstein Institute on Self-Determination at Princeton University Press, 2012; William C. Wohlforth, "Gilpinian Realism and International Relations,"

International Relations, No. 25, 2011, pp. 499-511; 納家政嗣「監訳者解説」ロバート・ギルピン（納家政嗣監訳、徳川家広訳）『覇権国の交代―戦争と変動の国際政治学』勁草書房、2022年、235-256頁; 島村『国際政治の＜変化＞を見る眼』、6-10頁も参照。

92）Stephen D. Krasner, ed, *International Regimes*, Cornell University Press, 1983; Robert O. Keohane, *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press, 1984, Robert O. Keohane, *International Institutions and State Power: Essay in International Relations Theory*, Westview Press, 1989; Stephen D. Krasner, *Structural Conflict: The Third World against Global Liberalism*, University of California Press, 1985; Andreas Hasenclever, Peter Mayer, and Volker Rittberger, *Theories of International Regimes*, Cambridge University Press, 1997; Robert Jackson & Georg Sorensen, *Introduction to International Relations: Theory and Approaches*, Sixth Edition, Oxford University Press, 2016[1999], ch. 4; 山本吉宣『国際レジームとガバナンス』有斐閣、2008年; 山越裕太「リベラリズム―ジャングルを克服して平和をつくろう！」草野、小川、藤田編著、前掲書、70-95頁。

93）John J. Mearsheimer, *The Great Delusion: Liberal Dream and International Realities*, Yale University Press, 2018; John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, Updated Edition, W.W. Norton & Company, 2014[2001]. 市原麻衣子「＜書評論文＞攻撃的リアリズムによる戦争発生の論理」『国際政治（特集: 国際政治研究の先端 一）』第136号、2004年、128-144頁も参照。

94）Rose, *op. cit*.

95）Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics*, Princeton University Press, 1976; Robert Jervis, "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 30, No. 2, 1978, pp. 167-214; Robert Jervis, *The Meaning of the Nuclear Revolution: Statecraft and the Prospect of Armageddon*, Cornell University Press, 1989; Robert Jervis, *System Effects: Complexity in Political and Social Life*, Princeton University Press, 1996; Robert Jervis, *American Foreign Policy in a New Era*, Routledge, 2005; Robert Jervis, *How Statesmen Think: The Psychology of International Politics*, Princeton University Press, 2017; Stephen M. Walt, *The Origin of Alliances*, Cornell University Press; 1987; Stephen M. Walt, *Taming American Power: The Global Response to U.S. Primacy*, W.W. Norton & Company, 2005; Jack Snyder, *Myth of Empire: Domestic Politics and International Ambition*, Cornell University Press, 1991; Charles L. Glaser, "The Security Dilemma Revisited," *World Politics*, Vol. 50, No. 1, 1997, pp. 171-201; Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and Roots of Conflict*, Cornell University Press, 1999; Barry R. Posen, *Restraint: A New Foundation*

for U.S. Grand Strategy, Cornell University Press, 2014.

96）Jervis, *Perception and Misperception in International Politics*; Jervis, *System Effects*; Jervis, *The Psychology of International Politics*.

97）Walt, *The Origin of Alliances*.

98）Walt, *Taming American Power*, pp. 13-14,125, 222-223,234, 236, 240-243, 299n.

99）Rose, *op. cit*., pp.144-172.

100）*Ibid*., p. 152; 島村『国際政治の＜変化＞を見る眼』、20頁。J. Samuel Barkin, *Realist Constructivism: Rethinking International Relations Theory*, Cambridge University Press, 2010も参照。

101）Thomas J. Christensen, *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947-1958*, Princeton University Press, 1996, p. 252.

102）Matthew Evangelista, "Domestic Structure and International Change," Michael W. Doyle and G. John Ikenberry, eds., *New Thinking in International Relations Theory*, Westview Press, 1997, p. 202; 島村『国際政治の＜変化＞を見る眼』、46-47頁。

103）Asle Toje and Barbara Kunz, eds., *Neoclassical Realism in European Politics: Bringing Power Back in*, Manchester University Press, 2012, pp. 5-12; 同上、61頁。

104）*Ibid*., ch. 1; 同上、61頁。

105）Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *op. cit*., p. 7; 島村『＜抑制と均衡＞のアメリカ政治外交』、15、124頁。Peter B. Evans, Harold K. Jacobson, and Robert D. Putnam, eds., *Double-Edged Diplomacy: International Bargaining and Domestic Politics*, Cambridge University Press, 1993も参照。

106）Rose, *op. cit*.; Gideon Rose, *How Wars End: Why We Always Fight the Last Battle: A History of American Intervention from World War I to Afghanistan*, Simon & Schuster Paperbacks, 2010; 芝崎厚士「国際問題文献紹介（ネオクラシカル・リアリズムと対外政策の理論）」『国際問題』第482号、2000, 80-82頁; Michael E. Brown, Sean M. Lynn-Jones, and Steven E. Miller, eds., *The Perils of Anarchy: Contemporary Realism and International Security*, The MIT Press, 1995; Christensen, *op. cit*.; Randall L. Scwheller, *Deadly Imbalances: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest*, Columbia University Press, 1998; William Curti Wohlforth, *The Elusive Balance: Power and Perceptions during the Cold War*, Cornell University Press, 1993; Fareed Zakaria, *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role*, Princeton University Press, 1998; Christopher Layne, *The Peace of Illusions: American Grand Strategy from 1940 to the Present*, Cornell University Press, 2007; Lobell,

Ripsman, and Taliaferro, eds., *Ibid*.,; Annette Freyberg-Inan, Ewan Harrison, Patrick James, eds., *Rethinking Realism in International Relations: Between Tradition and Innovation*, Johns Hopkins University Press, 2009 (esp. Balkan and Ozgur Ozdamar, "Neoclassical Realism and Foreign Policy Crisis"); Jacek Wiectawski, *Understanding Realism in Contemporary International Relations: beyond the Structural Realist Perspective*, Nomos, 2009, ch. Ⅲ; Mark R. Brawley, *Political Economy and Grand Strategy: A Neoclassical Realist View*, Routledge, 2010; Tom Dyson, Tom, *Neoclassical Realism and Defence Reform in Post-Cold War Europe*, Palgrave Macmillan, 2010; Toje and Kunz, eds., *op. cit*; Colin Dueck, *The Obama Doctrine: American Grand Strategy Today*, Oxford University Press, 2015; Colin Dueck, *Reluctant Crusaders: Power, Culture, and Change in American Grand Strategy*, Princeton University Press, 2016; Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, Steven E. Lobell, *Neoclassical Realist Theory of International Politics*, Oxford University Press, 2016; Kevin Narizny, "On Systemic Paradigms and Domestic Politics: A Critique of the Newest Realism," *International Security*, Vol. 42, No. 2, 2017, pp. 155-190; Paolo Rosa, *Neoclassical Realism and the Underdevelopment of China's Nuclear Doctrine*, Palgrave Macmillan, 2018; Maiko Ichihara, *Japan's International Democracy Assistance as Soft Power: Neoclassical Realist Analysis*, Routledge, 2017; 島村『国際政治の＜変化＞を見る眼』序章と第1章; 寺田貴「米国のTPP離脱と日本の通商外交―新古典派現実主義によるTPP11形成過程分析」村田晃嗣『外交と戦略』彩流社、2023年、205-227頁。

107）Jahn, ed., *op. cit*.; Michael C. Williams, ed., *Realism Reconsidered: The Legacy of Hans J. Morgenthau in International Relations*, Oxford University Press, 2007; Neacsu, *op. cit*. ; Navari, ed., *op. cit*.; Pedro, *op. cit*.; 山中仁美（佐々木雄太監訳、吉留公太、山本健、三牧聖子、板橋拓己、浜由樹子訳）『戦争と戦争のはざまで―E・H・カーと世界大戦』ナカニシヤ出版、2017年; 岡垣、前掲書、第7章; Gaddis, *George F. Kennan*; ジョン・ルカーチ（菅英輝訳）『評伝ジョージ・ケナン―対ソ「封じ込め」の提唱者』法政大学出版会、2011年; O'Sullivan, *op. cit*.; Olivier Schmitt, ed., *Raymond Aron and International Relations*, Routledge, 2021; Iain Stewart, *Raymond Aron and Liberal Thought in the Twentieth Century*, Cambridge University Press, 2019; Brian C. Anderson, *Raymond Aron: The Recovery of the Political*, Rowman & Littlefield, 1998.

108）島村『国際政治の＜変化＞を見る眼』、28-29頁、第5章。

109）島村『＜抑制と均衡＞のアメリカ政治外交』、78-79頁。

110）Toje and Kunz, eds., *op. cit*.

111）Mearsheimer, *The Great Delusion*; Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power*

Politics; John J. Mearsheimer, "Bound to Fail: The Rise and Fall of the Liberal International Order," *International Security*, Vol. 43, No. 4, 2019, pp. 7–50; Walter Russell Mead, "The Big Shift: How American Democracy Fails Its Way to Success," *Foreign Affairs*, Vol. 97, No. 3, 2018, pp. 10–19; Amitav Acharya, *The End of American World Order*, 2nd Edition, Polity Press, 2018; Barry R. Posen, "The Rise of lliberal Hegemony: Trump's Surprising Grand Strategy," *Foreign Affairs*, Vol. 97, No. 2, 2018, pp. 20–27; Graham Allison, "The Myth of the Liberal Order," *Foreign Affairs*, Vol. 97, No. 4, 2018, pp. 125, 128, 130; Andrew J. Bacevich, "The 'Global Order' Myth," Jervis, Robert, Francis J. Gavin, Joshua Rovner, and Diane N. Lavrosse, *Chaos in the Liberal Order: The Trump Presidency and International Politics in the Twenty-First Century*, Columbia University Press, 2018, pp. 210–217; Alexander Cooley and Daniel Nexon, *Exit from Hegemony: The Unraveling of the American Global Order*, Oxford University Press, 2020; Matthew Kroenig, *The Return of Great Power Rivalry: Democracy versus Autocracy from the Ancient World to the U.S. and China*, Oxford University Press, 2020; Niall Ferguson, *The Square and Tower: Network, Hierarchies and Struggle for Global Power*, Penguin, 2017; Robert Kagan, *The Jungle Grows Back: America and Our Imperial World*, Alfred A. Knopf, 2018; Robert Kagan, *The World America Made*, Alfred A. Knopf, 2012; Robert Kagan, *The Return of History and the End of Dreams*, Vintage, 2008; Robert Kagan, *Of Paradise and Power: America and Europe in the New World Order*, A Division of Random House, Inc., 2003; Gideon Rachman, *Zero-Sum World: Politics, Power and Prosperity after the Clash*, Atlantic Books, 2010; Gideon Rachman, *Easternization*, Wylie Agency Ltd., 2017; Niall Ferguson vs. Fareed Zakaria, *Is This the End of the Liberal International Order?*, Anansi, 2017. 島村直幸「アメリカ中心のリベラルな国際秩序は、はたして維持されるのか？」『法学新報』(中央大学)、第128巻第9号、2012年、239–285頁も参照。

112) Gideon Rose, "The Forth Founding: The United States and the Liberal Order," *Foreign Affairs*, Vol. 98, No. 1, 2019, pp. 10–21.

113) 渡邉昭夫「＜書評論文＞E.H. カーとハンス・モーゲンソーとの対話」『国際政治(特集：国際政治における合理的選択)』第181号、2015年、159–169頁を参照。

114) Frederick L. Schuman, *International Politics: The Western State System and the World Community*, Sixth Edition, Mcgraw-Hill Book Company, Ltd, 1958[1933].

115) Hannah Arendt, *The Origin of Totalitarianism*, Penguin Classics, 2017[1951]; Karl Polanyi, *The Great Transformation: The Political Economic Origins of Our Time*, Second Edition, Beacon Press, 2001[1944]. パトリシア・オーウェンズ(中本義彦、矢野久美子訳)『戦争と政治の間—ハンナ・アーレントの国際関係思

想』岩波書店、2007年; 矢野久美子『ハンナ・アレント―「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』中公新書、2020年; ケン・クリムスティーン（百木漠訳）『ハンナ・アーレント、三つの逃亡』みすず書房、2023年; 川崎修『ハンナ・アレント』講談社学術文庫、2014年; 森分大輔『ハンナ・アーレント―屹立する思考の全貌』ちくま新書、2019年; 牧野雅彦『ハンナ・アレント―全体主義という悪夢』講談社現代新書、2022年; 仲正昌樹『今こそアーレントを読み直す』講談社現代新書、2009年; 若森みどり『カール・ポランニー―市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版、2011年; 佐藤光『カール・ポランニーの社会哲学―『大転換』後』ミネルヴァ書房、2006年; 若森みどり『カール・ポランニーの経済学入門』平凡社新書、2015年も参照。

116）A. T. Mahan, *The Influence of Sea Power upon History 1660-1783*, Dover Publications, Inc, 2015[1890]; A. T. Mahan, *The Problem of Asia and Its Effect upon International Politics*, Elibron Classics, 2005[1900]; Halford John Mackinder, *Democratic Ideals and Reality: A Study in the Politics of Reconstruction*, Forgotten Books, 2015[1919]; Nicholas J. Spykman, *America's Strategy in World Politics: The United States and the Balance of Power*, Transaction Publishers, 2007[1942]. Zbigniew Brzezinski, *The Grand Chessboard: American Primacy and Its Geostrategic Imperatives*, Basic Books, 1997も参照。

117）J. G. A. ポーコック（田中秀夫、奥田 敬、森岡邦泰訳）『マキァヴェリアン・モーメントーフィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版会、2008年; ロック、前掲書; 大森雄太郎『アメリカ革命とジョン・ロック』慶應義塾大学出版会、2005年; ニッコロ・マキャベリ（河島英昭訳）『君主論』岩波文庫、1998年; ホッブス（水田洋訳）『リバイアサン（全4巻）』岩波文庫、1954年; J. J. ルソー（桑原武夫、前川貞次郎訳）『社会契約論』岩波文庫、1954年; 鹿子生浩輝『マキャベリ―『君主論』をよむ』岩波新書、2019年。

118）ポーコック、同上。

119）Charles A. Kupchan and Peter L. Trubowitz, "Dead Center: The Demise of Liberal Internationalism in the United States," *International Security*, Vol. 32, No. 2 (Fall 2007), pp. 7-44; Charles A. Kupchan, *No One's World: The West, The Rising Rest, and the Coming Global Turn*, Oxford University Press, 2012; Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: The Classic on the Causes and Effects of liberal Thought in the U.S.* , A Harvest Book, 1991[1955]; George H. Nush, *The Conservative Intellectual Movement in America since 1945*, Intercollegiate Studies Institute, 1996; 中山俊宏『アメリカン・イデオロギー―保守主義運動と政治的分断』勁草書房、2013年; 中山俊宏『介入するアメリカ―理念国家の世界観』勁草書房、2013年; 中山俊宏『理念の国がきしむとき―オバマ・トランプ・

バイデンとアメリカ』千倉書房、2023年; 会田弘嗣『破綻するアメリカ』岩波書店、2017年; 渡辺靖『アメリカとは何か—自画像と世界観をめぐる相剋』岩波書店、2022年。

120) Edward Hallett Carr, *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, Harper & Row, Publishers, 1964[1939]. 山中、前掲書; 山中仁美『戦間期国際政治とE・H・カー』岩波書店、2017年; 佐藤史郎、三牧聖子、清水耕介編『E・H・カーを読む』ナカニシア出版、2022年; ジョナサン・ハラム (角田史幸、川口良、中島理暁訳)『誠実という悪徳—E・H・カー 1892-1982』現代思潮新社、2007年も参照。

121) W. M. Roger Louis and Hedley Bull. eds., *The Special Relationship: Ango-American Relations since 1945*, Oxford University press, 1986; Alan P. Dobson, *Anglo-American Relations in the Twentieth Century: Of Friendship, Conflict and the Rise and Decliner of Superpowers*, Routledge. 1995; John Baylis, *Anglo American Defence Relations 1939-1984*, Second Edition, Macmillan, 1984[1981]; 島村直幸「『特別な関係』の危機と再構築 一九五六～六三年」君塚直隆、細谷雄一、永野隆行編『イギリスとアメリカ—世界秩序を築いた四百年』勁草書房、2016年、165-187頁; 永野隆行「＜書評論文＞イギリスと戦後東南アジア国際関係」『国際政治 (特集: 比較政治と国際政治の間)』第128号、2001年、211-222頁。

122) H. Butterfield and Martin Wight, eds., *Diplomatic Investigations: Essays in the Theory of International Relations*, Cambridge University Press, 1966; Hedley Bull, *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Macmillan, 1977; Hedley Bull & Adam Watson, eds., *The Expansion of International Society*, Oxford University Press, 1984; Martin Wight, edited by Gabriel Wight and Brian Porter, *International Theory: The Three Tradition*, Leicester University Press, 1991; Martin Wight, edited by Hedley Bull and Carsten Holbraad, *Power Politics*, Revised Edition, Continuum, 1995; James Mayall, *World Politics: Progress and Its Limits*, Polity, 2000; Andrew Linklater and Hidemi Suganami, *The English School of International Relations: A Contemporary Reassessment*, Cambridge University Press, 2006; Hidemi Suganami, *The Domestic World Order Proposals*, Cambridge University Press, 2008; Barry Buzan, *An Introduction to the English School of International Relations*, Polity, 2014. 佐藤誠、大中真、池田丈佑編『英国学派の国際関係理論』日本経済評論社、2013年; 大中真『マーティン・ワイトの国際理論—英国学派における国際法史の伝統』国際書院、2020年も参照。

123) Susan Strange, *Paths to International Political Economy*, Routledge, 2011; Susan Strange, *Mad Money*, Manchester University Press, 2015[1998]; Susan Strange, *The Retreat of the State: The Diffusion of Power in the World Economy*, Cambridge University Press, 1996; Susan Strange, *State and Markets*, Second

Edition, Pinter Pub. Ltd, 1994[1988]; Susan Strange, *Casino Capitalism*, Manchester University Press, 2015[1986].

124) Strange, *State and Markets*, ch. 1..

125) Joseph S. Nye, Jr, *Bound to Lead: Changing Nature of American Power*, Basin Books, 1990.

126) Raymond Aron, *Peace & War: A Theory of International Relation*, Transaction Publishers, 2009[1961]; Raymond Aron, *Clausewitz: Philosopher of War*, Routledge, 2023; Raymond Aron, Translated by Ernst Fawel, *The Great Debate: Theories of Nuclear Strategy*, Anchor Book, 1965[1964]; Raymond Aron, *The Imperial Republic: The United States and the World 1945-1973*, Transaction Publishers, 2009[1974]; レイモン・アロン（柏岡富英、田所昌幸、嘉納もも訳）『世紀末の国際関係―アロンの最後のメッセージ』昭和堂、1984年。Schmitt, ed., *op. cit*.も参照。

127) Aron, *Peace & War*.

128) 渡邊啓貴『シャルル・ドゴール―民主主義の中のリーダーシップへの苦闘』慶應義塾大学出版会、2013年。

129) 大矢根編『国際関係理論と日本外交史』; 宮下雄一郎『フランス国際関係史「学派」と理論をめぐる問題』慶應義塾大学出版会、2011年。

130) 葛谷彩『20世紀ドイツの国際政治思想―文明論・リアリズム・グローバリゼーション』南窓社、2005年; 板橋拓己「『アメリカの社会科学』にどう向き合うか―ドイツの国際関係論（IR）の挑戦」葛谷彩、小川浩之、人志邨邦行編著『歴史のなかの国際秩序観―「アメリカの社会科学」を超えて』2017年、37-55頁; 大矢根編、同上。

131) 飯田洋介『ビスマルク外交と大英帝国―伝統的外交手法の可能性と限界』勁草書房、2010年; 飯田洋介『ビスマルク―ドイツ帝国を築いた政治外交術』中公新書、2015年; 板橋拓己『アデナウアー―現代ドイツを創った政治家』中公新書、2014年; 板橋拓己『分断の克服 1989-1990―統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦』中公選書、2012年; アンドレアス・フォークトマイヤー（岡田浩平訳）『西ドイツ外交とエーゴン・バール』三元社、2014年; グレゴーア・ショレゲン（岡田浩平訳）『ヴィリー・ブラントの生涯』三元社、2015年; 妹尾哲志『戦後西ドイツ外交の分水嶺―東方政策と分断克服の戦略、1963～75年』晃洋書房、2011年; 妹尾哲志『冷戦変容期の独米関係と西ドイツ外交』晃洋書房、2022年; 板橋拓己、妹尾哲志編著『現代ドイツ政治外交史―占領期からメルケル政権まで』ミネルヴァ書房、2023年。

132) 岡義武『国際政治史』岩波書店、1955年; 高坂正堯『海洋国家日本の構想』中央公論社、1965年; 高坂正堯『国際政治―恐怖と希望』中公新書、1966年; 高坂正堯『古典外交の成熟と崩壊』中央公論社、1978年; 高坂正堯『平和と危機の構造―ポス

ト冷戦の国際政治』NHKライブラリー、1995年; 永井陽之助『平和の代償』中央公論社、1966年; 永井陽之助『冷戦の起源―戦後アジアの国際環境』中央公論社、1978年; 永井陽之助『時間の政治学』中央公論社、1979年; 永井陽之助『現代と戦略』中央公論社、1985年; 永井陽之助『二〇世紀の遺産』中央公論社、1985年; 村田晃嗣『大統領の挫折―カーター政権の在韓米軍撤退政策』有斐閣、1998年; 村田晃嗣『現代アメリカ外交の変容―レーガン、ブッシュからオバマへ』有斐閣、2009年; 村田晃嗣『レーガン―いかにして「アメリカの偶像」となったか』中公新書、2011年; 原、前掲書; 石井修『国際政治史としての二〇世紀』有信堂、2000年; 石井修『権力の翳り―米国のアジア政策とは何だったのか』柏書房、2015年; 中西寛『国際政治とは何か―地球社会における人間と秩序』中公新書、2003年; 納家政嗣『国際紛争と予防外交』有斐閣、2003年; 土山實男『安全保障の国際政治学―焦りと驕り［第2版］』有斐閣、2014［2004］年; 鈴木基史『平和と安全保障』東京大学出版会、2007年; 細谷雄一『外交―多文明時代の対話と交渉』有斐閣、2007年; 細谷雄一『国際秩序―18世紀ヨーロッパから21世紀アジアへ』中公新書、2011年; 岡垣、前掲書。

133）村田晃嗣「リアリズム―その日本的特徴」田中明彦、中西寛、飯田敬輔編『日本の国際政治学 1 学としての国際政治』有斐閣、2009年、41-60頁; 宮城大蔵『現代日本外交史―冷戦後の模索、首相たちの決断』中公新書、2016年; 島村『＜抑制と均衡＞のアメリカ政治外交』、14章。